

## 『祖堂集』の基礎方言

衣川 賢次

### 前 言

『祖堂集』二十卷は周知のように、完存する南宗禪の最古の禪宗燈史書である。本書の形成過程は、五代南唐保大10年（西暦952年）に一卷本が泉州招慶寺の靜・筠二禪徳によって編纂され、ついで約60年から100年のあいだに十卷本に増廣されたが、中國ではその後宋代に失傳し、高麗に傳わった十卷本が新羅・高麗僧の傳記を増補し二十卷本として高宗32年（西暦1245年）に開版された。その版本は今も韓國の國寶「八萬大藏經」中に保存されている。前世紀の初め、韓國伽耶山海印寺の古建築を調査した日本人建築史家によってこの「八萬大藏經」經版の遺存が學界に紹介され、その藏外補版の一部『祖堂集』も禪宗史料として注目されるに至った<sup>(1)</sup>。

本書の資料價值は、第一に禪宗史學から見るとき、宋代以後に參究された唐五代禪問答のもっとも古い形態を留めるものとして、研究の資料的基點に位置するところにある。すなわち、本書によって唐五代の禪思想を明らかにすることができるのであり、また唐五代から宋代に至って、禪思想には大きな變化がおこるが、本書と宋代以後編纂の燈史（たとえば『景德傳燈錄』等）、公案集（た

---

1 拙稿「祖堂集の校理」、『東洋文化』第83號、特集 中國の禪、2003。また中國佛教典籍選刊『祖堂集』中華書局、下冊、附録二「關於祖堂集の校理」、2007參照。

例えば『碧巖錄』、『從容錄』、『無門關』等)を比較することによって、その演變を知ることができる。それは禪宗史における唐宋變革ともいうべきものである。第二に漢語史學から見るとき、本書は10世紀福建の泉州で編纂された禪宗史料集として、その言語に對話の口語成分を多く含む性格から、唐五代の南方の実際の言語状況を反映している。東南部で編纂された『祖堂集』と西北部で發見された敦煌資料を比較することを通して、唐五代の南方方言の具體相を知ることができる可能性がある。ここに『祖堂集』の基礎方言としてかんがえようとするのは、この問題である。

一.

『祖堂集』が漢語史學から注目される主たる關心は、本書が10世紀福建の泉州で編纂されたのなら、そこに閩語の特徴が看取されるかという點にあるが、『祖堂集』のほかに同時代の福建のまとまった方言資料が得られないため、これは相當困難な問題である。まずは90年代からこの問題を論じてきた梅祖麟氏の4篇の論文「唐代、宋代共同語的語法和現代方言的語法」(1994)<sup>(2)</sup>、「幾個閩語語法成分的時間層次」(1995)<sup>(3)</sup>、「《祖堂集》的方言基礎和它的形成過程」(1997)<sup>(4)</sup>、「幾個閩語虛詞在文獻上和方言中出現的年代」(2002)<sup>(5)</sup>に據って、『祖堂集』と關わる部分の論點を整理してみよう。

---

2 『中國境內語言暨語言學』第二輯，中央研究院歷史語言研究所，1994。『梅祖麟語言學論文集』，商務印書館，2000。

3 『中央研究院歷史語言研究所集刊』第六十六本第一分，1995。『梅祖麟語言學論文集』，商務印書館，2000。

4 《Journal of Chinese Linguistics》monograph series number10, *Studies on the History of Chinese Syntax*, edited by Chaofen Sun, 1997.

5 何大安主編『南北是非：漢語方言的差異與變化』，中央研究院歷史語言研究所（籌備處）。

梅祖麟氏の論點は、『祖堂集』に現れる語法に現代閩方言のそれと共通するものを見だし、それらが唐宋代にはすでに形成されていた閩語の一部であった、というものである。梅氏は現代閩方言が特徴的にもつ古い語法成分は四つの時間層に属するという。[一] 遠古（漢人入殖以前の居民百越民族の非漢語的言語に淵源をもつ）；[二] 秦漢（秦漢時代の入殖漢人がもたらした上古漢語）；[三] 南朝（永嘉の亂の際に避難した中原，江南からの入殖者がもたらした中古漢語〔當時の共通語〕，六朝江東方言）；[四] 晚唐（唐末の動亂の際に避難した中原，江南からの移民がもたらした唐宋共通語）。四期のうちの後三期は三度にわたる閩地への移民の漢語の波及と定著をいう。これは現代閩方言の歴史的淵源を指摘したものである。「《祖堂集》的方言基礎和它的形成過程」では、『祖堂集』の大部分は晚唐五代の共通語，すなわち北方語で書かれている（『祖堂集』の基礎方言は北方語である）が，わづかに引用の偈頌と會話に偶然垣間見える閩語の語法成分があると言い，その例として，【一】人稱代名詞の複數形式〔儂〕，【二】畜牲雌雄成分の後置形式〔～母〕，【三】方位介詞〔著〕，【四】遠指代名詞〔許〕，【五】疑問詞〔底〕を挙げ，現代閩方言との對應・一致を例證しようとしている。

いまこれら五個の語法成分について，梅氏のようにいきなり現代方言と同定するのでなく，まづ同時代の中古，近代漢語中の用例を閲して，その性質を検討しよう。

【一】人稱代名詞の複數形〔儂〕について梅氏はいう，

《祖堂集》〈睡龍和尚傳〉：

我今齊舉唱，方便示汝儂（儂）。

作偈の睡龍和尚是福唐縣人。福唐縣在今福建福清縣東南。…「汝儂」在閩語裡的意思是「你們」，「方便示汝儂」就是說「方便示你們」。羅杰瑞（《漢

語概説》) 曾經說明南朝「人」義的「儂」字, 閩語用作複數詞尾。北京話的「我們、你們、他們」, 有些閩語方言說「我儂、汝儂、伊儂」(陳章太、李如龍《閩語研究》)。…至於廈門話以及其他閩南話, 人稱代名詞的單數和複數差一個 -n 尾。…羅杰瑞說明, 「儂」字失落韻母, 剩下聲母 n-, 黏附在「我、汝、伊」的後面, 就成為複數 -n 尾。換句話說, 閩南話複數人稱代名詞以前也是「我儂、汝儂、伊儂」。

只有現代閩語人稱代名詞複數詞尾用「~儂」, 用「-n (<儂)」。因此, 我們看到《祖堂集》〈睡龍和尚傳〉裡的「汝儂」, 立刻可以推論「汝儂」是反映當時的閩語。而且, 雖然「我儂、伊儂」不出現於《祖堂集》或其他同時的白話文獻, 我們還是可以確定晚唐五代的閩語複數人稱代名詞用「我儂、汝儂、伊儂」。(梅祖麟1997)

『祖堂集』卷11睡龍和尚章に引く「示學偈」(443/535)<sup>(6)</sup>の全文は以下のとおり。

瞎眼善解通, 聾耳却獲功。	その消息は盲人こそが得, 聾者こそが獲るのだ
一躰歸無性, 六處本來同。	本體はひっきょう無性, 六根はもとひとつゆえに
我今齊舉唱, 方便示汝濃。	わしはいま方便を廻らせ, すべてを君に示してやろう
相傳佛祖印, 繼續老胡宗。	佛祖の教えを傳え, 釋迦の宗教を繼承してゆくために

睡龍道溥は福唐縣の人, 生卒年は未詳。雪峰義存(822-908)の弟子で, 泉州五峰寺に住した。この偈は, 言葉に據らず(ただ沈黙によって)第一義を示すという禪宗獨特の「法の傳授」を主題としている。本章のべつの偈「頌三種

---

6 『祖堂集』の引用の頁は, 禪文化研究所『祖堂集』, 基本典籍選刊, 1994/ 孫昌武, 衣川賢次, 西口芳男點校『祖堂集』, 中國佛教典籍選刊, 中華書局, 2007。

病人」と主題（盲聾啞の人にいかに法を伝えるか）も韻も同じであるところから見て、兩偈は一聯の作であろう。ここの「濃」は規範的には「儂」と書かれるが、「農」と書く例もある（『莊子』讓王篇成玄英疏「農，人也。今江南喚人作農。』）。王觀國『學林』卷4「方俗聲語」條に「江左人稱我汝，皆加儂字。詩人亦或用之。孟東野詩曰：儂是拍浪兒，是也。」<sup>(7)</sup>というが、これを引く呉曾『能改齋漫錄』卷1「詩人用儂字」條<sup>(8)</sup>でも、「我儂」，「汝儂」の用例を挙げべきところ、なぜか六朝樂府の「儂」一字の例ばかりである。「～儂」の形式をもつ人稱代名詞は、晉宋樂府に「他儂」が2例見えるが、いずれも第三人稱ではなく他稱（「他人，よその人」の義）である。

詐我不出門，冥就他儂宿。鹿轉方相頭，丁倒欺人目。（『樂府詩集』卷46讀曲歌）

わたしに嘘をついて外出しないと言いながら、夜にはほかの女のところへ行って泊るのね（前2句）。

揚州石榴花，摘插雙襟中。葳蕤當憶我，莫持艷他儂。（同上，卷49，孟珠曲）

石榴花の美しさを見て、わたしを思い出してちょうだい。その花をほかの女にやったりしないでね（後2句）。

讀曲歌は「呉聲細吟」するもの、孟珠曲は舞曲の歌辭である。『全唐詩』には三見する。

馳譽超先輩，居官下我儂。（卷867，安錡「題賈島墓」）

名聲は天下に知れわたりながら，官位はわしより下だった。

7 王觀國『學林』卷4，方俗聲語，學術筆記叢刊，中華書局，1988，131頁。

8 呉曾『能改齋漫錄』卷1，詩人用儂字，上海古籍出版社，1979，6頁。

王老小兒吹笛看，我儂試舞爾儂看。(卷634，司空圖「力疾山下吳村看杏花」十九首)

王さんの子どもが笛を吹いて見せたら，わしは踊ってあんたに見せよう。

你輩見儂底歡喜吳人謂儂爲我，別是一般滋味子呼味爲寐，永在我儂心子裏。  
(卷8，吳越王錢鏐「巡衣錦軍制還鄉曲」)

おまえさんがたはわしの姿を見てよろこんでくれた。かくべつのうれしさよ。

いつまでもわしの心から消えることはない。

吳越王錢鏐の歌は吳音で即興の山歌を作り，みづから歌ったという(『湘山野錄』卷中)。「我儂」はわし，「爾儂」はあんたの意。賈島の墓は任地の四川安岳縣にあり，その同僚であった人の追悼詩である。

陳忠敏，潘悟雲「論吳語の人稱代詞」によると，「儂」という語は漢語の中にその根拠を見いだすことができず，おそらくは古百越語の族稱・自稱に由来する語で，漢民族の移民につれて百越族がしだいに漢化し，その基礎において形成された吳・閩方言のうちの底層詞である。初めは「人」の義であったが，第一人稱にも用いられる。第一人稱の「我」は北方語であり，南北朝期に南方人は「儂」を用いたが，北方語の「我」が浸透して共存し，ついには同義疊架形式の「我儂」が生れ，この類化で第二人稱「汝儂」，第三人稱「渠儂」が生れたという<sup>(9)</sup>。

問題は梅氏が言うように『祖堂集』の「汝儂」が「汝」の複数形式であるか否かである。現代閩南方言において「儂」は人稱代名詞に附いて複数を表わすとされるが，それはいつから現れるのか。上掲の「示學偈」の例では単数，複

---

9 李如龍，張雙雙主編『代詞』，中國東南部方言比較研究叢書第4輯，暨南大學出版社，1999。これには異論があり，「儂」は古百越語とは無関係で，儂＝農＝人と解することも可能である(黃典誠「閩語人字的本字」，『黃典誠語言學論文集』，廈門大學出版社，2003)。

数どちらとも解し得るのであって、偈を與えた學人の数によって、「汝儂」は單數にも複數にもなり得る（こういう偈は、書いて與える場合もあれば、説法場で聽衆の僧らに口頭で示す場合もあるが、ここでは情況が明示されていない）。漢語人稱代名詞は原則として單複不分であり、純粹に複數であることを指示する成分が現れるのはかなり遅く、「們」の前身「門」（中原）、「每」，「懣」（北方）が出現するのは、確實には唐末から宋初のようである<sup>(10)</sup>。しかし、以下の宋代編纂の禪語錄の「我儂」，「你儂」，「渠儂」の用例を見ると、「儂」は宋人王觀國が言うように南方人のもちいる方言（口語）人稱代名詞の接尾辭であって、複數を示す成分であると見なすことはできない。

- (1) 你諸人幸是可憐生，擔帶負物作什麼？見即便見。你若不見，一切不得巧言妙句問老僧。巧來妙去，即轉轉勿交涉。賺殺人！所以我儂尋常問你諸人：「佛前佛後，不說別事。你諸人道看，是什麼？見什麼？」（『古尊宿語錄』卷36投子和尚語錄，中國佛教典籍選刊，中華書局，679頁）

諸君はさいわいまっとうな人間だ。それなのにお荷物をかついで、いったいどういうつもりか。見てとったならそれでいい。もし見えぬなら、けっして言葉巧みにわしに問うてはならぬ。巧みになればなるほど擦れ違う。人を馬鹿にしてはならぬ！だからわしはいつも諸君に問うのだ。「佛陀以前も以後も、別のことを説いたのではない。諸君、言ってみよ、さあ何だ！何が見えたか？」

- (2) 舉公期和尚：因往羅漢，路逢一騎牛翁子。期間：「羅漢路向什麼處去？」翁拍牛云：「道道！」期喝云：「這畜生！」翁子云：「羅漢路向什麼處去？」

10 潘悟雲「漢語複數詞尾考源」，徐丹編『量與複數——中國境內語言的跨時空考察』，商務印書館，2010。

期却拍牛云：「道道！」翁云：「直饒與麼，猶少蹄角在。」期便打，翁子便拍牛走。

佛海云：「你儂我儂，狹路相逢。尋常蹄角，互換機鋒。拍牛歸去，不見其蹤。儼非羅漢老兒，定是草裏大蟲。」（『拈八方珠玉集』卷3，續藏經第119冊）

公期和尚の話をとりあげた。羅漢院へでかける途中、牛の背に乗ったおやじに出逢った。公期が問う、「羅漢院へはどう行くのか。」おやじは牛を叩いて、「おい！言え！」公期はどなって、「この畜生！」おやじ、「羅漢院へはどう行くのか。」今度は公期が牛を叩いて、「おい！言え！」おやじ、「牛になったつもりでも、蹄も角もないぞ。」公期はおやじを打とうとしたが、すばやく牛に鞭打って行ってしまった。

佛海心月禪師はいう、「あんたとわしが、狭い小路でばったり出くわした。ふたりが牛になって、機鋒を闘わせる。ぼんと牛を叩いて歸ってゆけば、何の痕跡も見えない。やつが羅漢院の主でなければ、きっと草叢の虎だろう。」

- (3) 上堂云：「孤筇長作水雲游，底事而今放下休？一點破幽明歷歷，十分合體冷湫湫。暗中須透金針穴，轉處還藏玉線頭。劫外家風茲日辨，渠儂真與我儂儔。」（『宏智禪師廣錄』卷4，T. 48. 36b）

上堂して言う。「一本の杖を手に道を求めて永らく雲水の旅に出ていたが、どうして今杖を捨ててやめたのか。無明を打破したゆえに、それがありありと見え、ぴったりとひとつになったら、孤獨が身に沁みた。暗がりでは針に糸を通そうと、ひょいと身を轉じたら糸の先が目に入るもの。劫外に超然たるわが家風を今日こそ明かそう、かれの眞實はわしとひとしいのだと。」

- (1) の投子大同（819～914）は舒州（安徽）の人、投子山も舒州にある。(2) の佛海心月（？～1254）は眉州（四川）の人、臨安府徑山に住した。(3) の宏



智正覺（1091～1157）は隰州（山西）の人，明州天童山に住した。以上の例に現れる「我儂」，「你儂」，「渠儂」はいづれも単数である。「～儂」が確實に複数を表わす例がいつから現れるのかは，いまだ明らかではなく，検討の必要がある。

【二】畜牲雌雄成分の後置形「～母」について梅氏はいう，

〈雪峰義存傳〉：

藏主便問：「三世諸佛在什麼處？」師忽然見有个猪母子，從山上走下來，恰到師面前。師便指云：「在猪母背上！」（卷7，雪峰和尚章）

参考《漢語方言詞匯》41－44頁，可知有些南方方言把畜牲的性別後置。…表示雌性的語詞，只有閩語明確地用「母」字。…上引〈雪峰義存傳〉裡的「猪母」，出自閩人之口，又與現在的閩語符合，可見反映當時的閩語。「猪母子」的意思是小母猪。閩語用詞尾「囡」表示小稱，跟「～子」，「～兒」相當。「猪母子」的「子」可能是訓讀的寫法，用「子」來表示「囡」字。（梅祖麟1997）

『祖堂集』卷7雪峰章第45則（292/357）はつぎのとおり。

師遊西院了，歸山次，問泯典座：「三世諸佛在什麼處？」典座無對。又問藏主，藏主對云：「〈不離當處常湛（湛）然〉。」師便唾之。師云：「你問我，我與你道。」藏主便問：「三世諸佛在什麼處？」師忽然見有个猪母子從山上走下來，恰到師面前，師便指云：「在猪母背上！」

師は福州の西院へ出かけて歸るとき，見送ってくれた泯典座に問いかけた，「過去，現在，未來の佛たちは，今どこにいるか？」典座は答えられなかった。つぎに藏主に問うと，「〈わが心のうちに靜かに鎮座します〉」と答えると，師はいきなり唾

を吐きかけた。「そなたがわしに問いなさい。答えてやろう。」藏主が問う、「過去、現在、未來の佛たちは、今どこにいるか？」師はそのとき、山から猪母子が駆けおりて目前に來たのを見て、咄嗟に指さして言った、「それ！猪母の背上だ！」

雪峰義存（822－908）は泉州南安縣の人。これは雪峰が福州西院の大安和尚（793－883）を訪ねての歸り、見送ってくれた典座と藏主に大安和尚の禪がどう受けとめられているか、試しに問うたのである。藏主は藏主らしく『證道歌』の一句をもって答えたが、これは大安の立場を體した答えであつた。『祖堂集』卷17福州西院章に、「有俗官問：『佛在什麼處？』師云：『不離心地。』」というのと同旨である。しかしこれは雪峰の強い嫌惡を招いた。佛とは生きてはたらくみづからの主體でなくして何であるか。そこで雪峰の答えは、咄嗟に山から駆けおりて目前に來た猪母子を指さして、「それ！猪母の背上だ！」。藏主が眼を向け見えたときの、いささかの思慮もさしはさまぬ、たれから授かつたものでもない、その「見える」という見聞覺知のはたらき、それこそがきみの本性（佛性）ではないのか、というのが雪峰の示唆であらう。

「猪母子」、「猪母」（「子」は口語接尾詞）という雌雄成分後置の形式は、たしかに南方方言である。『中國方言地圖集（詞匯卷）』（商務印書館，2008）の「母猪」の項を見ると、現代方言では雌雄成分前置の形式（母猪）は北方に、雌雄成分後置の形式（猪母）は南方に、長江附近を境に截然と分かれて分布している。ではこの分布はいつ形成されたのか。この問題の解明にはいまだ十分な準備ができていないのであるが、とりあえず中古・近代漢語期の用例を検討してみよう。

『東坡志林』卷3「猪母佛」條に、蜀地では「猪母」が口語だとはっきり言っている。

眉州青神縣道側，有一小佛屋，俗謂之猪母佛。云：百年前有牝猪伏於此，

化爲泉，有二鯉魚泉中云。蓋猪龍也。蜀人謂牝猪爲母，而立佛堂其上，故以名之。泉出石上，深不及二尺，大旱不竭<sup>(11)</sup>。

眉州青神縣の道側に一字の小さな祠があり，ひとびとは「猪母佛」と呼んでいる。百年前に牝猪が伏せていたところが泉になり，なかに二尾の鯉がいるという。それは猪龍だったのだ。蜀の人は牝猪のことを「猪母」と呼び，その上に祠を建てたので，その名がついているのである。石の隙間から湧く泉は深さ二尺にも満たないが，旱魃のときにも涸れない。

すなわち，文言では「牝猪」と言い，口語では「猪母」と言った。蘇軾（1037－1101）は四川眉州の人，その郷里に「猪母佛」と呼ばれる祠があり，起原は百年前，五代のころ（10世紀）という。

「猪母」という語の早い例は南北朝の佛典に見られる。漢譯律典『薩婆多部毘尼摩得勒伽』では卷1に「無毛熟母猪邊作姪入。」（T. 23. 569c），卷3に「彼家中繫一母猪，母猪展轉挽繩欲去。」（同，584a），卷8に「有比丘共熟猪母作淫。」（同，611c）とあるように，兩形式が區別されることなく同時に出現している（僧伽跋摩は天竺の人，建康長干寺に滞在して，宋元嘉10年より19年の間〔433～442〕に譯出した）。この律典では「母猪」4次，「猪母」1次である。また唐代の筆記小説の用例では，郎餘令（7世紀河北中山の人）『冥報拾遺』隋耿伏生の條（『法苑珠林』卷57引）にも，「數歲之後，母遂終亡，變作母猪」と「伏生聞之悲泣，不能自已，更別加心供養猪母」<sup>(12)</sup>というように，やはり同一作品中に兩形式が出現している。この場合仔細にみると前者は「猪」に變じたことに，後者は猪となった「母」<sup>はは</sup>に，それぞれ焦點があるようであり，文脈のなかで中心概念が異なるように使い分けをしている。これはおそらく「猪母」と「母

11 『東坡志林 仇池筆記』卷3，華東師範大學出版社，1983，90頁。

12 『冥報記 廣異記』，古小説叢刊，中華書局，1992，109頁。

猪」の兩形式が併存した情況のなかで區別の意識が生じたのであろう。張鷟（字文成，河北深州の人。7～8世紀）撰『朝野僉載』卷3に「夜夢一母猪極大，李仙藥占曰：母猪，豨主也，君必得屯主。」<sup>(13)</sup>唐牛僧孺（隴西の人，779～848）撰『玄怪錄』卷4尹縱之の條には，主人公が情を通じた王氏が雌猪であったことを，「…遽策杖尋血而行，至山下王朝猪圈，血蹤入焉。乃視之，一大母猪，無後右蹄殻，血引牆下，見縱之怒目而走。」<sup>(14)</sup>といい，「猪母」は現れない。

「猪母」以外では，漢譯經典『佛說鹿母經』（T. 3）の「鹿母」がある。西晉武帝時代（265－290）に竺法護（先祖は月氏出身であるが，敦煌に居住していた）が長安で譯出したもので，經題が「鹿母」であるにもかかわらず，經文には「鹿母」と「母鹿」が併出し，「鹿母」は經文の冒頭に1回出るのみで，あとはみな「母鹿」の形式をとり，その数は1：9である。

また唐義淨（齊州の人，635－713）譯『根本說一切有部毘奈耶藥事』卷7の一段中には「母雞」（2回）と「雞母」（4回）が同時に出現する（T. 24, 31b）。『祖堂集』卷20五冠山和尚章には，梅祖麟氏も指摘するように「母雞」が3例見え，「雞母」は見えない。五冠山順之（？－893？）は新羅の人，大中12年（858）に入唐し，湖南で仰山慧寂禪師に師事得法した。この語は歸國後の新羅での著作「頓證實際篇」に見える。

敦煌發見の『目連緣起』（P. 2193）には，目連の母青提夫人が阿鼻地獄から救済されて王城で狗身となったことを，「今得離於地獄，化爲母狗之身」<sup>(15)</sup>という。——こうしてみると，中古・近代漢語の時期では兩形式が併存していたようである。雌雄成分前置は北方に，後置は南方にという傾斜が幾分あらわれているようではあるが。

呉處厚『青箱雜記』は北宋元祐二年（1087）の序をもつ隨筆集であるが，こ

13 『隋唐嘉話 朝野僉載』，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1979，61頁。

14 『玄怪錄 續玄怪錄』，古小説叢刊，中華書局，1982，112頁。

15 黄征，張涌泉『敦煌變文校注』，中華書局，1997，1015頁。

の問題に関わる記述がある。

嶺南風俗，相呼不以行第，唯以各人所生男女小名呼其父母。元豐中，余任大理丞，斷賓州奏案。有民韋超，男名首，即呼韋超作父首；韋邀男名滿，即呼韋邀作父滿；韋全女名插娘，即呼韋全作父插；韋庶女名睡娘，即呼韋庶作父睡，妻作嬌睡<sup>(16)</sup>。

嶺南の習俗では、人を呼ぶのに排行で言わず、その人の子どもの幼名でその父母を呼ぶのである。元豐年間（1078－1085）にわたしは大理丞に任ぜられ、賓州の裁判に赴いた。そのとき、平民の韋超は息子の名が首であったから、韋超を「父首」と呼んでいた。同じように、韋邀は息子の名が滿であったから韋邀を「父滿」と呼び、韋全はむすめの名が插娘であったから韋全を「父插」と呼び、韋庶はむすめの名が睡娘であったから韋庶を「父睡」、妻を「嬌睡」と呼んでいた。

賓州は今の廣西壮族自治区賓陽縣。嶺南では人を通稱で呼ぶとき、子どもの名でその父を呼ぶ習慣があり、たとえば韋超の子の名が首なら、韋超を「父首」と呼び、その語序が通常の逆だというのである。呉處厚は閩北邵武の人であるが、郷里の閩地とも違うという口ぶりである。ここに至って、かつて橋本萬太郎氏が『言語類型地理論』で展開された議論を想起しないわけにはゆかない。

性別をあらわす「おすの」、「めすの」にあたる修飾語（正確には形態素）が、南方「方言」ではつねに被修飾成分のあとに来るのに對して、北方「方言」では、決定的に「修飾語＋被修飾語」の語順になるのである。この事実を、名詞修飾語が被修飾語のあとにくる南アジア諸語にお

16 呉處厚『青箱筆記』卷3，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1985，29頁。

ける語順と、逆に被修飾語の前にくるアルタイ諸語の語順の問題と、どうして切り離して考えることができようか<sup>(17)</sup>。

そこに「屬格の用法」として紹介された諸言語の対照をみると、上記賓州における呼稱の語構成法がカム・タイ語（侗台語）と同一であることがわかる。

アルタイ語	‘わたくしの’+‘ちち’
中國語群	‘わたくしの’+‘ちち’
チベット・ビルマ語	‘わたくしの’+‘ちち’
ミャオ・ヤオ語	‘わたくし (の)’+‘ちち’
カム・タイ語	‘ちち’+‘わたくし (の)’ <sup>(18)</sup>

そうすると、北宋期嶺南賓州の特殊な呼稱法は、おそらく是非漢語の古越語に由來する「生きた化石」として存在していたようである<sup>(19)</sup>。

周知のように、橋本氏の言語類型地理論は、アジア大陸に分布する諸言語の名詞句構成の基本的統辭原則が、名詞に對する修飾成分を南では名詞の後に置き、北では名詞の前に置く形式をとるが、その對立の構圖が東アジア大陸の中央に位置する中國の南北方言に反映しており、しかもこの南方語から北方語への統辭類型の地理的推移が、漢語の古代語から現代語への歴史的變化に對應している、というものである。橋本氏が推測するように、名詞句の構成變化に決

---

17 橋本萬太郎『言語類型地理論』、弘文堂、1978、69頁。

18 同上、62頁。

19 この種の領屬構造句は南方民族言語（壯侗、苗瑤、南亞、南島諸語）においてはもとの固有形式が〈名詞＋領屬語〉であり、のち漢語との接觸によって〈領屬語＋名詞〉に變化移行しつつあること、呉福祥「南方民族語言領屬結構式語序の演變與變異——基於接觸語言學和語言類型學的分析」、『東方語言學』第6輯、上海教育出版社、2009參照。

定的な影響をもたらしたのが、紀元前10世紀末の西北漢民族の周の中原侵入であるならば、現代語における南北対峙の形勢ができあがるあいだ、併存の時間は長期にわたっていることになる。上述の雌雄成分後置・前置の兩形式が中古・近代漢語期において併存現象を呈しているのは、そこに位置づけられるであろうし、畜牲雌雄成分の後置の形式は、古越語の古い淵源をもつ形式の遺存の可能性が高い。ただし倒序現象一般を論ずるには、語彙のひとつひとつの歴史について綿密な調査が必要である<sup>(20)</sup>。

### 【三】方位介詞〔著〕

『祖堂集』巻7雪峰和尚章第51則に引く「暉和尚頌」（294/359）について、梅氏はいう、

〈雪峰義存傳〉暉和尚頌曰：

雪峰養得一條蛇，寄著南山意如何。

不是尋常毒惡物，參玄須得會先陀。

「坐在椅子上」厦門話說「做 ti-6 椅团頂」，福州話說「坐 tyɔʔ-8 椅懸頂」，ti-6, tyɔʔ-8 の來源は「著」字（梅祖麟《漢語方言裡虛詞“著”字三種用法的來源》）。南北朝已經有方位介詞「著」字的用例，如《世說新語》裡的「長文尚小，載著車中，…文若亦小，坐著膝前」。上引《祖堂集》の「寄著南山意如何」，「著」字又是方位介詞。現在北方話方位介詞用「在」字，晚唐五代已是如此，例如《敦煌變文集》裡的（參看何樂士《敦煌變文與〈世說新語〉若干語法特點的比較》）：

20 橋本氏の論に對する検討には、丁邦新「漢語詞序問題札記」，「論漢語方言中中心語－修飾語的反常詞序問題」，『中國語言學論文集』中華書局，2008，項夢冰「試論漢語方言複合詞的異序現象」，『語言研究』1988年第2期，があるが，いづれも有効な反論になっているとは言い難い。

潛身伏在蘆中。(伍子胥變文)

住在綏州茶城村。(漢將王陵變)

只今葬在黃河北，西南望見受降城。(王昭君變文)

而且《祖堂集》又有「寄在」的用例：

白雲千丈之線，寄在碧潭，浮定有無。(卷7，夾山章)

師偈曰：我有一寶琴，寄在曠野中。(卷8，疎山章)

「寄著南山」和「寄在碧潭」結構相同，「著」和「在」的差別是因為不同的方言不同的虛詞作為方位介詞。但是《敦煌變文集》也有方位詞「著」的用例：

於是獲收珍寶，脫下翻（旛）旗，埋著地中。(李陵變文)

單于殊常之義，坐著我衆蕃上。(同上)

本文認為「坐著膝前」這種〔V＋著＋處所詞〕句法在南北朝時期是全國性的。晚唐五代時期，北方的口語裡「在」字替代「著」字，形成〔V＋在＋處所詞〕，但在書面文字沿用〔V＋著＋處所詞〕。在福建地區，口語裡一直保存著〔V＋著＋處所詞〕，所以《祖堂集》裡的「寄著南山」可能是反映當時的閩語。（梅祖麟1997）

暉和尚頌の意味はつぎのようである。

雪峰養得一條蛇， 雪峯和尚が飼う一匹の蛇

寄著南山意如何？ 南山で育てたのは何の意圖か

不是尋常毒惡物， こいつはふつうの毒蛇ではないぞ

參玄須得會先陀。 禪に參ずる者は咬まれて死なぬよう， 怜悯でなくてはならぬ

この頌は雪峯和尚の示衆「南山有鼈鼻蛇，是諸人好看取！」（南山に蝮蛇がいる。諸君，咬まれぬよう注意せよ！）に對して詠じたほめうた。示衆は，雪



峯自身を蝮蛇に擬し、參學者が教説に惑わされて自己を見失わぬように注意を與えるもののようである。

ここの「著」が方位介詞で、うしろに場所を示す賓語をとる〔V＋在＋處所詞〕構造の「在」と同じ機能を持ち、南北朝期には通語であったが、晚唐五代になると北方口語では「在」に交替し、福建では南北朝期の〔V＋著＋處所詞〕が依然つかわれ、それは當時の閩語であろう、なんとすれば現在の福建方言にその用法が遺存しているからだ、というのが梅氏の論である。

暉和尚頌の第2句の「寄」は第1句に「養」が出るから「寄養」（蛇をよそ〔南山〕にあずけて育てる）の義であろう。しかし「著」が動詞としての實義を存する「安置」（置く）の義であるのか、先行動詞「寄」の表わす動作の結果の持續を示すのか、あるいは梅氏が言うように介詞としての「在」（または「到」）の義となっているのかは、にわかには判じがたい。そこでひとまず、『祖堂集』中の〔V＋著＋處所詞〕のすべての用例を見てみると、

(1) 有僧問：「髻中珠，誰人得？」師曰：「不賞翫者得。」僧曰：「安著何處？」

師曰：「待有所在，即說似你。」（卷5，龍潭和尚章，189/247）cf.「公四大身若子長大，萬卷何處安著？」（卷15，歸宗和尚章，573/684）

(2) 師云：「咄！這饒舌沙彌，猶掛著脣齒在。」（卷4，藥山和尚章，179/235）

(3) 師云：「大德，龜毛拂子、兔角拄杖，藏著何處？」（卷5，三平和尚，209/269）

(4) 師云：「老僧自疾不能救，爭能救得諸人疾？」學曰：「與摩則來者無依。」師云：「依則榻著地，不依則一任東西。」（卷18，趙州和尚章，663/791）

案：榻，『趙州錄』作踏，當從。因二字音近而誤。

上掲の例（１）「安著」（置く：安＝著），（２）「掛著」（〔舌を脣齒に〕掛ける，すなわちしゃべる義），（３）「藏著」（しまう，かくす），（４）「榻（踏）著地」（脚で地を踏む，すなわち立つ，留まる義）。みな複合動詞（同義複詞）かもしくは動補構造（動作の結果，結果の持続）である。したがって「寄著南山」の場合も安置もしくは持続の義をもつ可能性を捨てきれないであろう。梅氏が例擧する南北朝の用例（『世説新語』）も敦煌變文の用例も，みな「著」がなお實義をもつ複合動詞もしくは動補構造と見てさしつかえない。敦煌變文，『祖堂集』に「～著」，「～在」がともに存するのは，それぞれ固有の機能をもっているからである。まして敦煌變文にも見えるものを當時の閩語だとは言えない。「著」が時代とともに語法化（虚化）するのは必然であるが，語法化の一般的過程，すなわち述語動詞から，同義・近義の複合動詞を構成し，さらに補語として動作の結果・結果の持続を表わす補助成分となり，また介詞化するという過程において「著」字を論ずるには，漢語史家が語法現象を發展の相において見ようとするのはよいとしても，確實な用例をもちいなければならず，あいまいな例によって強引に斷ずるのも，いきなり現代方言と結合させて用法を規定するのも，ともに説得力を欠いていると言わねばならない<sup>(21)</sup>。

#### 【四】遠指詞〔許〕

『祖堂集』卷10鏡清和尚章（384/472）に引く「象骨山頌」について，梅氏はいう，

---

21 「著」の用法を論じたもののなかでは，志村良治「動詞『著』について——その原義と破讀，使成複合動詞化および補助動詞化」（『中國中世語法史研究』三冬社，1984）が最も詳細かつ慎重に論じている。

〈鏡清和尚傳〉：

師題《象骨山頌》曰：

密密誰知要，明明許也無。

森蘿含本性，山岳盡如如。

「師」是鏡清和尚，温州人。象骨山就是雪峰山。「許」是遠指詞，「誰」，「許」對文，「明明許也無」是說「明明那（個）也沒有」。「許」的用例，東晉南朝樂府用例頗多：

風吹冬簾起，許時寒薄飛。（子夜歌）

督護初征時，儂亦惡聞許。（宋武帝丁督護歌）

團扇復團扇，持許自遮面。（團扇郎）

有些閩方言，吳方言還保存著「許」（那）字遠指詞的用法，例如廈門話 khūa-5 tsi-3 khūa-5 hi-3 「看只看許」（看這看那）；潮州話 hə-3 tshoŋ-7 「許撮」（那些）；福州話 xi-3 zieŋ-7 「許隻」（那個）。吳語温州話也用 hi-3 「許」作遠指詞。（梅祖麟1997）

まづ鏡清の頌がなにを表現しているのか，解釋をこころみる必要がある。「密密」，「明明」という語は，禪語録ではしばしば名狀しがたい道（眞實，佛性）の存在を暗示するものとして現れる。

- (1) 師上堂云：「道由悟達，不在語言。況見密密堂堂，曾無間隔。不勞心意，暫借回光。日用全功，迷徒自背。」（『景德傳燈錄』卷11，鄧州香嚴智閑禪師章）

道は悟ることによってのみ到達できる。言葉は不要だ。ましてそれはどっしりとはっきりと，寸分の隔てなく現れ出ているのだから。得ようと心を煩わさず，ちょっと回光返照するだけでよい。日常のはたらきに全うされているのに，道を見失った人がかつてに背をむけているにすぎぬ。

- (2) 問：「如何是靈峯境？」師曰：「萬疊青山如釘出，兩條綠水若圖成。」曰：「如何是境中人？」師曰：「明明密密，密密明明。」（『景德傳燈錄』卷24，福州靈峯志恩禪師章）

問う、「ここ靈峯はいかなるところぞ？」師、「幾重にもたたなわる青山は珍饈の列，ふたすじ流れる緑水はみごとな繪。」僧、「して，その主人は？」師，「明らかにどっしりと，どっしりと明らかに。」

- (3) 小參。僧問：「密密綿綿，不容著眼；明明了了，相與傳心。作麼生是傳底心？」師云：「混時無影像，辨處絕蹤由。」（『宏智禪師廣錄』卷5）

問う，「〈どっしりしているが眼には見えず，はっきりとしているゆえ心よりに心に伝える〉と言われます。伝えられた心とは何でしょうか？」師，「混沌たる時にはすがたは無く，分かった時にはあとかたも見えない。」

「密密」は堂々たる山の形容（『爾雅』釋山）。つぎに，第二句「明明許也無？」の「許也無」三字は一見解しがたいけれども，用例を調べてみると，すべて「許すや？」という疑問形式である。いくつかを挙げよう。

- (1) 問：「學人擬伸一問，還許也無？」師云：「〈佛不奪衆生所願〉。」問：「如何舉唱，即得不負來機？」師云：「痛領一問。」（『雲門匡真禪師廣錄』卷上）

問う，「わたくし，ひとつ質問したいのですが，お許しできますか？」師，「〈佛ハ衆生ノ願ヒヲ奪ハズ。〉」僧，「いかに宗乗を言いとめたら，相手の期待に背かずにはすみませうか。」師，「その問いは痛切に受けとめた。」

- (2) 問：「學人欲求一物時如何？」師云：「汝擬求箇什麼？」學云：「和尚還容許也無？」師云：「〈廓落長安道，不障往來人〉。」學云：「請師指示。」

師云：「〈展手不開拳，分明善看取〉。」（『天聖廣燈錄』 卷24襄州石門慧徹禪師章）

問う、「わたくし、ある物が欲しいのですが。」師、「そなたは何が欲しいのか？」僧、「和尚はお許しくされますか？」師、「〈廓落タル長安ヘノ道ハ、往來ノ人ヲ障エズ。〉」僧、「どうかご教示ください。」師、「〈手ヲ展ベテ拳ヲ開カズ，分明ニ善ク看取セヨ〉」

(3) …法眼既陞座，深復出問：「今日奉勅問話，師還許也無？」眼云：「許。」深云：「鶴子過新羅。」捧綵便行。（『聯燈會要』 卷26深・明二上座章）

法眼禪師が法座にのぼると、深上座がまた前に出て問うた、「本日は陛下の命を拜して、質問させていただきますが、お許しくされますか？」師、「かまわぬ。」深上座は、「鷹はとくに新羅へ飛び去ってしまいましたぞ。」と言って、綾絹を頂戴して出て行った。

見られるとおり、「許す」のは「問う」、「求める」、「問話する」こと。ならばいまの「象骨山頌」においては「（密密明明たるそれを）知ろうとする」ことである。

鏡清和尚の頌の題の「象骨山」とは、雪峯と命名される以前の山の名。この頌の前條に心と境に關するふたつの問答があり、「見色見心」、「聞聲悟道」といわれる道理を問うテーマであるが、それに對する見かたを偈頌の形式で敍べたものである。その問答は、

問：「如何是聲色中面目？」師云：「現（顯）人不見。」僧云：「太綿密生！」師云：「體自如此。」僧云：「學人如何趣向？」師云：「活人投機。」

問う、「外界に現れた眞實とはどんなものでしょうか？」師、「尊貴なる人は見えぬ。」僧、「なんと綿密な！」師、「本體としてもとよりそうなのだ。」僧、「で

は、どのように向かえばよいのでしょうか？」師、「活動する者はその機に投ずる。」

問：「聞處爲什麼只聞不見？見處爲什麼只見不聞？」師云：「〈各各自縁不縁他〉。」

問う、「耳はなぜ聲のみ聞こえて見えず、眼はなぜ形のみ見えて聞こえないのでしょうか？」師、「〈耳は聲に、眼は色に、それぞれの対象にはたらきかけるのみなるゆえに。〉」

第二の問答の答えは、『金光明經』卷1 空品第五の偈「六情諸根，各各自縁；諸塵境界，不行他縁」をそのままちいて答えたのであって、鏡清はこれを補う意圖で、目前の象骨山を指さし、この頌を述べたのであろう。つまり教理問答に墮してしまった對話を、「見色見心」，「聞聲悟道」の機縁の場へ立て直しをはかろうとしたわけである。

鏡清和尚の「象骨山頌」の意味がそういうことだとすると、梅氏が現代福建方言で「許」に遠指詞（普通話の「那」に相當）の用法があることを根據に、「明明那（個）也沒有」とした解釋はまったくの望文生義である。頌の意味はつぎのようになるであろう。

密密誰知要？	どっしりとしたそれは樞要をうかがい知れず
明明許也無？	はっきりとしたそれを知ることは可能なのか
森羅含本性，	森羅萬象に本性はやどる
山岳盡如如。	この象骨山のすべてにそれがそのまま顯現しているのだ

#### 【五】疑問代詞「底」

『祖堂集』卷11雲門和尚章「十二時偈」（428/514）について、梅氏はいう、

〈雲門和尚傳〉：

黄昏戌，把火尋牛是底物。

「底物」是「什麼東西」，雲門和尚是蘇州中吳府嘉興人。「底」（何，什麼）的用例，東晉南朝樂府用例頗多：

寒衣尚未了，郎喚儂底爲？（子夜秋歌）

單身如螢火，持底報郎恩？（歡聞歌）

君非鸕鶿鳥，底爲守空池？（歡聞變歌）

有些閩方言，吳方言還保存著「底」（何，什麼）。例如廈門話 ti-6 laŋ-2，福州話 tie-6 nøyŋ-2「底儂」（誰，何人）；潮州話 ti-6 pōi-2「底畔」（哪邊）；福州話 tie-6 zieʔ-7（< ts-）「底隻」（哪個）。吳語丹陽話「底告」指「什麼」。用「底」或「底高」指「什麼」的還有溧陽、金壇、靖江。（梅祖麟1997）

雲門「十二時偈」第11首「黄昏戌」偈の一首はつぎのとおり。

黄昏戌，把火尋牛是底物？素體相呈却道非，奴郎不辨誰受屈？（428/514）

（黄昏戌，たいまつを手に逃げた牛を捜しまわっているご自身は、いったい何者だ？當體まるごと差し出されているのに、それでないと言い張るとは！主人と奴隸の區別もできぬせいで、不當な扱いを受けるのは誰なのか？）

逃げた牛を捜すとは，見失った自己を捜すことの喩え。「何物」（なに）を南方方言で「底物」ということについては，周知のように顔師古『匡謬正俗』に説がある。

問：「俗謂何物爲底。底義何訓？」答曰：「此本言何等物，其後遂省，但言直云等物耳。等字音都在反，轉丁兒反。左太冲《吳都賦》云：軫田無數，

膏腴兼倍，原隰殊品，竄隆異等。蓋其證也。今吳越人呼齊等皆丁兒反。應璩（璩）詩：文章不經國，筐篋無尺書，用等稱才學，往往見歎譽。此言譏其用何等才學見歎譽乎。以是知去何而直言等，其言已舊。今人不詳其本，乃作底字，非也。」（顏師古『匡謬正俗』卷6）<sup>(22)</sup>

問い、「世間で〈何物〉（なに）を〈底〉と言っているが、どうして〈底〉というのか？」

答え、「〈何物〉はもとは〈何等物〉と言ったのだが、のち省略してただ〈等物〉と言うようになった。〈等〉の音は都在反だが、丁兒反に轉じた。左思の吳都賦に「軫田無數，膏腴兼倍，原隰殊品，竄隆異等。」とあって、〈等〉は〈倍〉と協韻しているのが前者の證據だ。今の吳越の人は〈齊等〉（ひとしい）の意味の場合、みな丁兒反と發音しているのが後者の音。應璩の百一詩に「文章不經國，筐篋無尺書，用等稱才學，往往見歎譽。」と言うのは、その人が「用何等才學見歎譽乎」（いったいどんな才能學識があつて稱贊されるというのか）と非難しているのである。この例から〈何〉を取り去って〈等〉だけになったことがわかるが、それはもう昔の言いかたになつてしまった。今どきの者はそのもとを知らないで〈底〉を使っている。それはいけない。」

これは疑問詞「底」の語源説で、「何等物」>「等物」>「等」>「底」という説明である<sup>(23)</sup>。この「等」の音都在反（端母海韻 \*pi 上聲）を、江南人は丁兒反（端母支韻 \*iɛ 平聲）に發音し、それが「底」（『廣韻』都禮切，端母齊韻 \*iei 上聲）の字で寫されたのだという。それは止攝が蟹攝に、上聲が平聲に訛つたということである。これは唐人の説明である。疑問詞「底」は南北朝期から現れ、江南の樂府作品に用例が多いとはいえ、分布は北朝人の會話（『北

22 劉曉東『匡謬正俗平議』192頁，山東大學出版社，1999。

23 馮春田「疑問代詞“底”的形成問題」（『歴史語言學研究』第1輯，2008）はこの説を論證している。



齊書』卷33徐之才傳)にもわたり、唐代では杜甫、李賀、白居易の詩にも、また敦煌俗文學「斷齋新婦文」(『敦煌變文校注』1216頁)にも見えるのであるから<sup>(24)</sup>、すでに通語としてもちいられていたと言えよう。したがって疑問詞「底」を閩語と言うわけにはゆかない。ただ韓愈(768-824)も「瀧吏」の詩(元和14年[819]作)で嶺南韶州の小吏の語として「底處所」と言っているから、當時の「東吳」(嶺南)でも使われていたのであろう。

潮州底處所？有罪乃流竄。儂幸無負犯，何由到而知？(『昌黎先生詩集注』卷6)

潮州はどんなところかだと？罪人になって流されるところよ。わしはさいわい罪を犯したことなどないから、行ったこともないので知らぬわい。

さらにもうひとつ福建漳州出身の人の用例も挙げておこう。

周匡物，字幾本，漳州人。唐元和十二年，王播榜下進士及第。時以詩歌著名。初周以家貧，徒步應舉，落魄風塵，懷刺不偶。路經錢塘江，乏僦船之資，久不得濟，乃於公館題詩云：「萬里茫茫天塹遙，秦皇底事不安橋？錢塘江口無錢過，又阻西陵兩信潮。」郡牧出見之，乃罪津吏。至今天下津渡，尚傳此詩諷誦。舟子不敢取舉選人錢者，自此始也。(『太平廣記』卷199，出『閩川名士傳』)

周匡物，字は幾本，漳州の人。唐元和十二年(817)，王播が禮部侍郎のとき進士に及第した。そのとき詩の名手として有名になった。はじめ，かれは貧乏だったので，徒歩で科擧の試験に出かけた。辛い旅にほとんど苦勞して，懷ろにした名刺を差し出す機會もなかった。都へ行くのに錢塘江にさしかかったが，船賃を工面でき

---

24 王力『漢語史稿』(『王力文集』第9卷，380頁，山東教育出版社，1988)，董志翹・蔡鏡浩『中古虛詞語法例釋』132頁，吉林教育出版社，1994)。

ず、いつまでも渡ることができなかった。そこで宿屋の壁に詩を書きつけた。「萬里茫茫として天塹（大河）遙かなり。秦皇底事ぞ橋を安かざる？ 錢塘江口、わたるに錢無く、又た西陵の兩信潮に阻まれり。」太守がうわさを聞きつけてやって来て、渡し場の役人を處罰した。天下の渡し場には今に至るまでこの詩が傳えられていて、船頭が科擧の應試者から運賃を取ろうとしないのは、ここに始まるのである。

以上の検討から、梅氏が『祖堂集』に見える閩語と推論するものは、「許」を遠指代名詞とする誤解、語法化過程でいまだ十分に虚化していない複合動詞成分（「V＋著＋處所詞」）を介詞とする誤認を除いて、古くは非漢語に由來し、中古・近代漢語では南北にわたって分布する雌雄成分後置形式（「～母」）であったり、あるいは同じく非漢語に由來し南方で通行した口語人稱代名詞詞尾（「儂」）であったり、唐五代の通語疑問詞（「底」）であったりする語法成分であった。これらの語法成分は閩語とは限定できず、唐末五代の閩地にも通行していた南方方言というべきであって、それが『祖堂集』の言語のひとつの特色を示しており、梅氏はそのことを指摘したと見るべきである。『祖堂集』に閩語が存在するかの問題、唐五代に閩語がどのように存在したのかという問題は、別の面から考察する必要がある。

梅氏が言うように、唐五代の「共通語」の語彙が現代閩語に遺存しているものは、たしかにある。たとえば張雙慶「『祖堂集』所見的泉州詞彙」（1996）には、今日の泉州話と共通する『祖堂集』語彙を50個列挙している（ただし個々の語彙の語史の具體的檢證はない）<sup>(25)</sup>。しかし現代泉州話の語彙が『祖堂集』に見いだされたとしても、ただちにそれを唐五代の閩語だということはできない。唐五代の閩語というとき、それは當時の中原からの移民がもたらした共通語（中原洛陽方言）とは區別される特徴をもつはづであり、必ずやその時代以

---

25 『第四屆國際閩方言研討會論文集』汕頭大學出版社、1996。

前から存し、しかも閩地にのみ通行した、遠古先住民の非漢語が干渉して形成された特殊な漢語（「底層詞」と呼ばれる）でなければならない。たとえば閩語の特徴詞とされる「囧」（子ども）や「郎罷」（父親）、「若夥」（いかほど）などは『祖堂集』には現れない。それらは唐以前の、しかも非漢語に淵源をもつ語彙・語法成分である。「汝濃（儂）」が1例あるが、これは上記のように非漢語に由来し、廣く南方に分布して見られるものであった。梅氏が挙げた『祖堂集』の2例（「汝濃（儂）」、「猪母」）は唐五代の南方方言を反映するものである。語法の面で、[～那？作摩？]形式が強い反詰のニュアンスをもつ南方方言であり、[還（有）～也無？]という疑問形式、完成體助詞[了後]が南方方言的性格を帯びている等の見解<sup>(26)</sup>とともに、『祖堂集』言語の特色を示すものと言えよう。

## 二.

一般に言語の變化は、音韻・語彙・語法のうち語法の變化がもっとも緩慢かつ保守的で、語彙と音韻はそれに比べて交替變化が速いと言われる。ただし語彙は流動的である。たとえば、『祖堂集』卷7雪峯章に「沁水杖子」という語を長慶慧稜（杭州海鹽縣の人、泉州・福州で活動）が使っているが、「沁」はがんらい「探水」の意味の北人の語彙だと言われ<sup>(27)</sup>、たしかに北人趙州從諗（青州臨淄の人）の言葉にも見られる<sup>(28)</sup>。また「田厰奴」という田舎者を罵倒する

26 [還～（也）無？]：葉建軍『《祖堂集》疑問句研究』中華書局，2010，111頁。〔（豈／可／何曾）VP 那作摩？〕：同，233頁。〔了後〕：林新年『《祖堂集》的動體助詞研究』上海三聯書店，2006，40頁。

27 韓愈「同宿聯句」：「義泉雖至近，盜索不敢沁」（孟郊句）注：「沁，七鳩切。北人以物探水爲沁」，『昌黎先生集注』卷8。

28 『景德傳燈錄』卷10趙州章：又到夾山，將拄杖入法堂。夾山曰：「作麼？」師曰：「沁水。」夾山曰：「一滴也無，沁什麼？」師倚杖而出（元本是兩「沁」字を「探」に改

語がしばしば使われ、もとは福唐（いま福建省福清市）の方言であったという<sup>(29)</sup>が、この語を北人趙州從諗が使い、しかるに『祖堂集』巻11永福和尚章に引かれるところでは「田庫奴」ではなく「田舎奴」となっている（永福和尚は福州閩縣の人）。要するに語彙は交流し、とりわけ行脚を事とした禪僧の交流は活潑であったろうから、その語彙が本人の出身地の方言であるとは認定できない面がある。

語法・語彙・音韻のうち、言葉の變化や差異がもっとも現れやすいのは音韻であろう。閩地の方言音が極めてわかりにくかったことは、宋代の隨筆にしばしば言及されるところである。たとえば、最も早い言及は『説郛』に引かれる呉越の贊寧（919－1001）『傳記』の句、

福州王氏有國，閩土人言音詭異，呼兩浙爲東廩，亦不詳其字義<sup>(30)</sup>。

福州は王氏が國を建てたが、閩地の土著の人の發音はけったいで、兩浙を「東廩」と呼んだりしているのも、何のことだかさっぱりわからない。

「東廩」は劉曉南氏の解釋によると「東圻巨衣切」の音變で、東邊（の鄰國）のこと。これは贊寧『傳載』の逸文であろうという。また、

襲明子曾經歷閩中，涉建溪，渡延平，灘瀧險阻，溪鳥繁萃。至蒼峽廟欲奠，而適召祝者不在。一小兒可十來歲，挂一片青葛，形狀焦瘦，始如

---

めている）。

29 陸庵善卿『祖庭事苑』巻2：「田庫，式夜切。當作舍」；圓悟『碧巖錄』第57則本則評唱：「田庫奴乃是福唐人鄉語，罵人似無意智相似」。庫，舍は同音であるが，もとの福唐の發音は別であったのであろう。

30 『説郛』巻5引。劉曉南「從歷史文獻的記述看早期閩語」，『漢語歷史方言研究』，上海人民出版社，2008。

鬼物，言對蠻獠，云是祝之子。因問：「父何許邪？」瞪目不答。又問：「爺在否？」亦不答。左右問，云：「此人言語俱別。」時值炎熾，因憑欄望遠，憶頃覽顧著作詩集有題《因音蹇》一篇，云：「南人呼父爲郎罷，子爲因拏。」再問小兒曰：「郎罷何處也？」便指前山云：「讓裏！」「讓裏」之言出也，其諸不可得詳。又至溫湯院，其水自山根涌出，可煮雞子。有一道者姓林，語甚分明，立舍宇頗有景趣。…（北宋 陳纂『葆光錄』卷3）<sup>(31)</sup>

わたしは以前閩地へ行ったことがあり、建溪を通して延平に渡った。流れが急で危険なところだったが、谷川には鳥がたくさん群れていた。蒼峽廟に到着して、おまいりをしようとおもい、祈禱師を呼んだがいなかった。十歳ばかりの子どもがいて、青黒い葛布をまとい、顔も黒く瘦せて、化け物かとおもったほどだ。その子の發する言葉は蠻人のそれで、祈禱師の子らしかった。「父親はどこにいるのか」と問うても、目を睜るばかりで答えない。もういちど、「おとうちゃんはいるか」と訊いても答えない。供の者も訊いてくれたが、わたしに「こいつらは發音も言葉も違うんです」と言う。その時はひどい暑さで、わたしは廟の欄干にもたれて、遠くを眺めていたら、ふと以前に讀んだ顧況の詩集に「因音は蹇」という一篇があったのを思い出した。それには、「福建人は父を〈郎罷〉と呼び、子を〈因拏〉と呼ぶ」と書いてあったのだ。そこでもういちどその子に「〈郎罷〉はどこかな」と問うと、目の前の山を指さして、「讓裏！」と言った。「讓裏」とは、出かけたということらしい。ほかにも言ったが詳しいことはわからなかった。それから溫湯院に着いた。そこは雞卵をゆでられるほどの熱い湯が、山麓から涌き出るのを引いていた。林という姓の僧がいて話したところ、かれの言葉はよくわかった。寺の建物はなかなか風情があった。…

31 陳纂『葆光錄』卷3、『五代史書彙編』第10冊、杭州出版社、2004、6306頁。

襲明子陳纂が記録している地點蒼峽（いま福建省南平市）は閩北地區で、ここでは子どもは土地の言葉（それが閩語であろう）のみを使うが、教養のある僧侶は閩語と共通語を使う雙方言の人であったことがわかる。著者陳纂（襲明子は號）は籍貫潁川（河南許昌）の人、五代十國の呉越（都城は杭州）に仕え、亡國ののち北宋に仕えたというから<sup>(32)</sup>、呉方言區にいたのであるが、この旅行で耳にした閩語を「言對蠻獠」（嶺南蠻人の言語）と言っており、閩北方言はまったく聞き取れなかったのである。顧況は中唐の詩人、蘇州の人、至徳2載（757）の進士。貞元3年から5年のあいだ（787～789）著作佐郎に任ぜられた<sup>(33)</sup>。「困一章」は「上古之什補亡訓傳十三章」のなかの一章で、その序に「困，哀閩也。」といい、自注に「困音蹇。閩俗，呼子爲困，父爲郎罷。」とある（『青箱雜記』卷6，胡震亨『唐音癸籤』卷23）。これも唐代の閩語を記録した数少ない例のひとつである。また、

劉樞密昌言，泉州人。爲起居郎，太宗連賜對三日，幾至日旰。捷給詠詠，善揣摩捭闔，以迎主意。未幾以諫議知密院，然士論所不協。君臣之會，亦隆替有限，一旦聖眷忽解，謂左右曰：「劉某奏對，皆操南音，朕理會一句不得。」因遂乞郡，允之。（北宋文瑩『玉壺清話』卷5）<sup>(34)</sup>

劉樞密，昌言は泉州の人。起居郎となって，畏れおおくも三日間連続で太宗の下問對奏にあずかり，食事をとる暇さえなかった。その對奏には當意即妙のユーモアがあり，辯説巧みに帝のご機嫌をとった。それからまもなく諫議大夫として樞密院をとりしきることになったが，朝廷の官僚のあいだに異

---

32 『葆光錄』は呉越の時事を多く記すが，成書は眞宗朝（10世紀末）という。李劍國『宋代志怪傳奇叙録』，南開大學出版社，1997，31頁。

33 傅璇琮『唐代詩人叢考』顧況考，中華書局，1980，395頁。

34 文瑩『湘山野錄 續錄 玉壺清話』，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，51頁，上掲注30 劉曉南論文。

議がおこった。君臣の際會というものは厚遇であれ冷遇であれ、長く続くものではない。一旦恩顧が冷めるや、帝は侍臣に「劉なにがしの對奏はひどい南方訛りで、朕はひとことも理解できぬ」と言われた。こうして外任を申し出ざるを得ず、許されたのである。

「南音」は閩語をいう。劉昌言は泉州の人、閩南語を話す生粋の泉人であり、南唐では泉州刺史陳洪進の幕客であったが、宋になって進士に及第し、汴梁（開封）の朝廷に出仕した。そういう經歷から、共通語を知らず閩語で通したとはおもわれないが、おそらくかれは強烈な閩語訛りの人だったのであろう。吳處厚『青箱雜記』卷6に載せる異傳では、「後判審官院，未百日，爲樞密副使。時有言其太驟者，太宗不聽。言者不已，乃謂：“昌言，閩人，語頗獠，恐奏對間，陛下難會。”太宗怒曰：“我自會得！”其眷如此。」となっていて、官人が劉昌言の閩語訛りを謗ったが、太宗は辯護したとしている。めざましい昇進が周囲の嫉妬をまねいたことが原因となって、かれの閩語訛りを口實に誹謗されたのである。いづれにせよ、閩音は非常に特殊であると認識されていた。

### 三.

『祖堂集』は編纂物であって、一人が書いた著書ではない。當時千七百衆といわれた福州雪峯山に各地からもたらされた語録、口碑の類が、そこで商量され記録され、雪峯の弟子たちによって泉州に流入し編纂されたと推測される。その言語は三つの層から成っている。

第一層：『寶林傳』（801）から抄出したことの明らかな部分。これは靜・筠二禪徳の編纂した原一卷本（952年成書）の大部分で、現行二十巻本の第1、2巻に相當する。西天二十七祖の諸章は『寶林傳』にもとづい

ており、その『寶林傳』はまた『付法藏因緣傳』や諸種の佛典や中國撰述の佛教史料を綴合して書かれているから、南北朝期の資料を唐中期に編纂した性質の言語と言える。卷2第二十八祖菩提達摩章の資料源は複雑で、『寶林傳』卷8以外に『二入四行論』や神會の『菩提達摩南宗定是非論』、『曹溪大師別傳』なども背景にあり、南北朝から唐代の資料を含むとかがえられる。達摩章に引用された多数の識は、もとづくところが未詳である。そのあとの東土六祖の章も、基本的には『寶林傳』に據っているであろうが、『寶林傳』卷九・十が散逸しているので明確にできない。第三十三祖惠能和尚章は『六祖壇經』にも據るところがあり、章末には10世紀雪峰教團の僧たちによる評論が加わっているから、この評論部分は區別して、第二層と見るべきである。

第二層：原一卷本から十卷本に増廣された部分で、現行二十卷本『祖堂集』の主要部分（卷3～卷19）にあたる。952年以後に増廣された中晩唐・五代期の資料で、とりわけ福建の雪峰教團に屬する禪僧の諸章は、『祖堂集』中もっとも新しい唐末五代9・10世紀の言語である。當時の福建は江西・湖南とならぶ禪宗のメッカであった。唐末五代の混亂期において相對的安定をみた福建には、各地から禪僧が往來し、かれらによって各地の口頭傳承を含む語録がもたらされ、雪峰門下で商量された。『祖堂集』十卷本は泉州招慶寺において増廣編纂されたとかがえられるが、これらの資料が基礎となっている。

第三層：高麗での開版（高宗32年、1245）に際して増補された新羅・高麗から入唐した禪師の章（唐に没した卷11齊雲和尚章を除く）。おおむね碑銘にもとづく傳記體の文章で、問答を含まないのが特徴である。卷20の大部分を占める五冠山瑞雲寺和尚章は、高麗僧が書いた古風な漢文の



佛教教理問答である。これらは域外漢文としてあつかうべきである。

したがって、『祖堂集』の言語は第二層部分が基幹資料であり、とりわけ福建雪峰教團に属する禪師の章（卷7雪峰章および卷10～13所收の雪峰門下禪師章）が重要である。そのもとづいた資料は基本的には10世紀ないしそれ以前の「共通語」で書かれているが、引用された會話や偈頌には南方方言の語法成分が散見する。ただし『祖堂集』のテキストの特異な點は、本文に文字の誤りがきわめて多いことである。その原因は第一に、禪の語録のテキストがもつ性質にある。唐末五代まで、口頭での上堂・示衆や問答を文字に記録することが（表面的には）禁ぜられていたため、秘かに寫し取られた記録は、文字の校訂を経ないまま流傳し、また文字づかいを検討することは文字に拘泥することとして潔しとしない風が一般的であったから、同音・近音、形似による誤りが放置されたままのこされている場合が多いのである<sup>(35)</sup>。第二に、高麗で開版されたのは再彫高麗大藏經の刊刻と同時ではあったが、高麗大藏經本體の刊刻事業とはべつに私的におこなわれたらしいので<sup>(36)</sup>、綿密な校訂作業はなされず、また高麗國難の時期であったゆえ、語録テキスト特有の訛誤は依然として放置されたままであったとおもわれる。さらに開版後版本は海印寺に藏されたが、摺刷されること少なく、廣く讀まれることもなく、版を改めることはなかった。したがって現在見られる唯一の版本は、10世紀泉州で編纂された十卷本の舊を存し、いわば寫本レヴェルにあるテキストと言ってよい（高麗刊刻時の誤刻の可能性は考慮しなくてよいこと、拙稿2003b 参照）。

以上のようなテキストの性質であるから、讀解にはかならず校訂を施さねばならない。わたしは『祖堂集』の本文を正確に復元する必要から、語録テクス

35 拙稿「禪籍の校讐學」、『田中良昭博士古稀記念論集 禪學研究の諸相』、大東出版社、2003a。

36 拙稿「祖堂集の校理」、『東洋文化』第83號、2003b。

ト特有の訛誤、すなわち同音・近音、形似による文字の誤りを校訂して、いくらかの異文別字（白字、錯別字）に現れた音韻資料を得たのであるが、異文別字に見られる音韻上の混用例、それに所收偈頌等の韻文340首に現れた特殊な通押現象を調べてみると、南方方言または閩語の讀音を想定してはじめて説明できるというものがあるようにおもわれた。唐五代の「共通語」の語彙が『祖堂集』においては異なった文字表記で書かれている場合、これが南方方言または閩地特有の發音習慣が干渉した結果、「共通語」では讀音の異なる文字で表記された可能性があり、方言音を参照してはじめて本文を正しく復元することができるのである<sup>(37)</sup>。

『祖堂集』の校勘には、『祖堂集』よりやや遅れて編纂された『景德傳燈錄』（1009年刊刻宣布）が當時北宋の著名文人によって修訂されたという経緯から、一般文人にも受容されうる「語錄」という文體の規範的表記をそなえているとかがえられ、重要な参照系として文字校訂の根據となすことができる。また兩宋期に編纂された『宗門統要集』（1093年）、『宗門聯燈會要』（1183年）、『五燈會元』（1252年）などの燈史も表記の規範化がおこなわれていると見られ、参照系に加えることができる。『祖堂集』とこれらの燈史を比較して得られた異文別字につき、音韻解釋を通じて、『祖堂集』の表記に現れた南方音または閩音を割り出すことができれば、『祖堂集』言語に南方方言または閩語の影響が認められるということになるであろう。

『祖堂集』の異文別字に現れた音韻的特徴がどの地方の方言音であるかを判断するには、唐末五代という時代の全国各地にわたる方音調査の資料がなければならぬが、むろんそのような便利なものが目下あるはずはない。そこで、魯國堯氏が『全宋詞』の詞人を地域別にグループ分けしてその押韻から方音的

37 拙稿『『祖堂集』異文別字校證——『祖堂集』中の音韻資料——』、『東洋文化研究所紀要』第157冊、2010。

特徴を分析した先驅的業績、および氏の指導のもと同じ手法によって各地域の方言を明らかにした一連の論文の集成『宋遼金用韻研究』<sup>(38)</sup>を利用することにする。ここには魯國堯、劉曉南氏の總論性の二篇をはじめ、中原・山東・四川・福建・江西・江浙・湖南および入聲研究の38篇が収められ、いわば『漢語方音字匯』の宋代資料集の觀をなしている。唐末五代は宋代と連續し、まさしくこの時期が中古漢語から近代漢語へ推移する轉換期にあつて、その音韻變化がおおよそ中唐期から始まると認められることは、唐宋變革という歴史觀にも符合するものであろう。このなかに『祖堂集』異文別字に見える音韻の特徴を位置づけてみようとおもうわけである。

異文別字の分析から基礎方言を割り出す手法において成功している古屋昭弘「説唱詞話『花關索傳』と明代の方言」<sup>(39)</sup>は、作品中の同音假借（異文別字）と『漢語方音字匯』をつきあわせ、その基礎方言が呉語（蘇州方言）であるという結論をみちびいている。明代と現代のあいだの400年という時間の隔たりは慎重な研究手續きによって填められるようである。『祖堂集』のばあい、今を隔つこと1000年、唐末五代のこれに匹敵するまとまった東南口語文獻は存在しないが、西北に敦煌發見の俗文學寫本群があり、音韻研究が蓄積されていて、比較對照の資料となしうる條件がある。ただし『祖堂集』の基礎方言の探索とは言つても、焦點は「『祖堂集』本文に唐末五代の閩語の音韻の特徴が見いだせるか」にあり、體系的比較を試みようとするのではない。『祖堂集』に現れた異文別字は偶然の産物であり、しかも敦煌寫本にくらべて非常に少なく、そこからうかがえる消息はわづかにすぎないからである。

38 顧問魯國堯、主編劉曉南・張令吾『宋遼金用韻研究』香港文化教育出版有限公司、2002。

39 『花關索傳の研究』附論、汲古書院、1989。

四.

以下に『祖堂集』異文別字例のうちから、方言音にかかわるとかながえられるものを聲母、韻母に分けて表示する（＊は文字の形似による通假の可能性があるため参考例とするもの。異文が兩義あい通ずる例は省いてある。混用の例舉は、正字／白字）<sup>(40)</sup>。

[聲母]

[一] 聲母清濁混用（太字が濁音）

[1] 唇音 幫並混用 彬／玼 盤／半 ＊撥／拔 ＊薄／博 ＊白／栢  
＊白／伯 ＊方／房 ＊府／符 ＊蒲／莆

[2] 舌音 端定混用 端／斷 大／多 ＊堂／當 ＊鄧／登  
知澄混用 ＊住／駐 ＊轉／傳  
徹澄混用 ＊趙／超

[3] 齒音 精從混用 齊／際 材／哉 ＊齊／濟 ＊精／情  
書禪混用 施／時

[4] 牙音 見群混用 期／機 ＊球／救 ＊誑／狂

[二] 齒音莊組章組不分，精組章組不分

生書混用 束／縮  
清昌混用 川／筌  
心昌混用 速／觸

[三] 牙音見溪混用 既／豈 堪／敢 勘／敢 舉／去 舉／起 个／

---

40 上掲拙稿（2010）に據る（一部補正）。以下の叙述には前稿と重複するところがある。『祖堂集』偈頌詩韻，同音通用例（『廣韻』に據る）はその附録に掲げている。

類 可／个 \* 鷄／溪 \* 脚／却

[四] 喉音影以混用 一／亦

[五] 喉音匣云混用 王／黄

## [一] 聲母清濁混用

聲母にかかわる異文別字40例のうち、清濁混用現象が過半（24例）を占めていることは、これが『祖堂集』用字のひとつの特徴を示すものと言えるであろう。24例のうち参考例を除く8例は、いずれも全濁聲母字が全清（不送氣）聲母字と混用された濁音清化の現象である。

### [1] 脣音幫並混用

(1) 彬 府巾切（幫母 [p] 眞韻平聲）／玼 符眞切（並母 [b] 眞韻平聲）

【例】師遊南州時，與王太傅一房坐。時有一沙彌揭簾欲入，見師與太傅，便放簾抽身退步。師云：「者沙彌好與二十棒。」太傅云：「與摩則延玼罪過。」（卷10，玄沙章，頁374/456）

【校】王太傅「延玼」は泉州刺史王延彬（885－930）を指す。王延彬は王審邽の長子，天祐2年（905）泉州刺史に任じ，乾化5年（915）に檢校太傅，天成5年（930）に檢校太尉を加えらる（『泉州府志』卷40封爵志）。玄沙師備（835－908）が泉州を訪れたのは開平元年（907）9月のこと（『玄沙廣錄』卷中）であるから，このとき王延彬はまだ太傅ではないのだが，これは記録された時點での稱號なのであろう。延彬を「延玼」と書いた例は本書のみである。

(2) 盤 薄官切（並母 [b] 桓韻平聲）／半 博幔切（幫母 [p] 換韻去聲）

【例】我也委汝來處，你亦不得錯認定半星。（卷10，長慶章，頁406/494）

【校】「定半星」は「定盤星」の音誤。『景德傳燈錄』卷21福州東禪玄亮

禪師章にも、「汝莫錯認定盤星。」（はかりの目盛りを見誤ってはいけない）の例がある。無著道忠『葛藤語箋』に「定盤星」の考證がある。「盤は皿の如し、以って量る所の物を安き、緒を以って（分銅を）衡の右邊に懸く。衡上に星を鏤み、一分一錢より次第に重數に向う。此れを定盤星と名づく。」（卷7 器具）「半」は『説文解字繫傳』朱翱反切では脯幔反で並母（卷3 半部）。

## [2] 舌音端定混用

(3) 斷 徒管切（定母 [d] 緩韻上聲）／端 多官切（端母 [t] 桓韻平聲）

【例】問：「如何是大人相？」師曰：「坐端十方不點頭。」（卷9，落浦章，頁340/415）

【校】「坐端」は「坐斷」の音誤。「坐斷」は要衝を占據して押えこむこと。たとえば、「欲解粘去縛，直須削迹吞聲，人人坐斷要津，箇箇壁立千仞。」（束縛を斷たんとせば、蹤跡を消し言語を去り、一人一人が要衝を押え、高く聳え立つごとくあれ。『碧巖錄』第22則垂示）、「坐斷天下人舌頭，直得無出氣處。」（世界の人間の舌を押えこんで息の根を止める。同，第84則垂示）。本書卷19臨濟和尚章にも、「大德，欲得山僧見處，坐斷報化佛頭，十地滿心猶如客作兒。」（諸君，わしの見方を知りたいなら，こうだ。報身佛・化身佛などは尻に敷き，十地菩薩も奴隷扱いだ。頁721/857）。朱翱反切では「斷」は都伴反（『説文解字繫傳』卷27，「伴」原誤「件」）で端母である。

(4) 大 唐佐切（定母 [d] 箇韻去聲）／多 得何切（端母 [t] 歌韻平聲）

【例】因措多入古寺，問僧：「此寺名什麼？」（卷11，齊雲章，頁432/521）

【校】「措多」は「措大」の音誤。本書卷8疎山章に「師因騎馬行次，措

大問：『既是騎馬，爲什麼不踏鐙？』（330頁）「措大」は窮措大，その語源の諸説は李匡父『資暇集』巻中に詳しい。

### [3] 齒音精從混用

- (5) 齊 祖奚切（從母 [dz] 齊韻平聲）／際 子例切（精母 [ts] 祭韻去聲）

【例】師云：「喚他來，隔窓相看。」侍者便喚。他新到一際上來。（卷6，石霜章，頁257/321）

【校】「一際」は「一齊」の音誤。高麗覺雲『拈頌說話』卷14石霜章に「古祖堂」を引き，「一齊」に改めている。

- (6) 材 昨哉切（從母 [dz] 怡韻平聲）／哉 祖才切（精母 [ts] 母怡韻平聲）

【例】有一僧礼拝，起來立地。師云：「大才藏拙戸。」其僧又向一邊立。云：「喪却棟梁哉。」（卷9，韶山章，頁348/426）

【校】「哉」は「材」の音誤。『景德傳燈錄』卷16韶山章は「哉」を「材」に作る。

### 齒音書禪混用

- (7) 施 式支切（書母 [ɕ] 支韻平聲）／時 市之切（禪母 [ʒ] 之韻平聲）

【例】師上堂云：「『眞實離言說，文字別時行』，諸上座在教不在教？」（卷13，福先招慶章，頁506/602）

【校】引用は四卷本『楞伽經』卷一の偈「言說別施行，眞實離名字，分別應初業，修行示眞實。」(T.36, 484c)。第1句（『祖堂集』引用では第2句）について，高崎直道注に「〈別施行〉は 'vyabhicāra'（逸脱。眞實から逸れること）の譯」という（『楞伽經』，佛典講座17，大藏出版，1980）。智旭の義疏が「魏云；言說離眞實。唐云：言說則變異。」

(續藏17, 504a)とわざわざ異譯を擧げて參考に供するのは、この句を含む前2句を同じく言語否定の方向に取るのが困難だからであろう。「言説別施行」はどうしても肯定的に讀める。『祖堂集』の引用「別時に行わる」は記憶ちがいであるが、おそらくその方向から出たのに相違ない。その際に「時」と「施」の音が、引用者にとって同音だったのであろう。書母は全清、禪母は全濁、すなわち聲母清濁混用が原因であった。

#### [4] 牙音見群混用

(8) 期 渠之切 (群母 [g] 之韻平聲) / 機 居依切 (見母 [k] 微韻平聲)

【例】僧問：「古人道：『服像雖殊，妙機不二』，如何是不二底妙機？」師云：「你試分看。」(卷13, 福先招慶章, 頁507/603)

【校】『祖堂集』の引用は僧肇「答劉遺民書」の二句。そこでは「妙機」は「妙期」である。元康疏にいう、「一道一俗，故云服像殊也。身雖有殊，心期不別也」。質問の僧ないし記録者は誤まって記憶していたらしいのだが、かれにあっては「妙機」と「妙期」が同音だったためであろう。

濁音清化の現象は中古から近代にかけての漢語音韻史における大きな変化のひとつで、北方より起こって南方へ波及し、その結果現代漢語方言では呉語(江蘇, 浙江), 湘語(湖南)をのぞくすべての方言から濁音が消失した<sup>(41)</sup>。その實情はすでに唐代の筆記史料に現れている<sup>(42)</sup>。

41 許寶華「中古全濁聲母在現代方言裏的演變」, 『漢語方言論集』, 北京語言大學出版社, 1997.

42 趙振鐸「唐人筆記裏面的方俗讀音」, 『辭書學論文集』, 商務印書館, 2006.



又隄防之隄字，並音丁奚反。江南末俗往往讀爲大奚反，以爲風流，恥作低音，不知何所憑據，轉相放習，此弊漸行於關中。（顏師古『匡謬正俗』卷5）<sup>(43)</sup>

また「隄防」の「隄」字も音は丁奚反 \* tiei であるが、江南の無教養な人々はしばしば大奚反 \* diei と呼んで流行しているのは、「低」\* tiei と同音になるのを厭うため<sup>(44)</sup>，根據のないことだが、それが真似られてひろがり、いまや關中にまでおよんでいる。

今荊襄人呼堤爲堤，晉絳人呼梭爲莖七戈反，關中人呼稻爲討，呼釜爲付，皆訛謬所習，亦曰坊中語也。（李肇『國史補』卷下）<sup>(45)</sup>

いま湖北荊州，襄州の人たちは「堤」\* diei を「堤」\* tiei と發音し，山西晉州，絳州の人たちは「梭」\* sua を莖七戈反 \* ts 'ua と發音し，關中の人たちは「稻」\* dau を「討」\* t 'au，「釜」\* biu を「付」\* piu と發音しているが，みな誤りが習慣となったもので，巷間の俗語というものである。

堤 都奚切（端母 [t] 齊韻平聲）／堤 杜奚切（定母 [d] 齊韻平聲）  
 稻 杜皓切（定母 [d] 皓韻上聲）／討 他浩切（透母 [t ' ] 皓韻上聲）  
 釜 扶雨切（並母 [b] 麌韻上聲）／付 幫遇切（幫母 [p] 遇韻去聲）

李肇『國史補』は開元より長慶に至る約百年（8－9世紀）のことを記した史料であるが，湖北荊州，襄州と關中では聲母の濁音清化が進行していること，これに對して顏師古（581－645）は，逆に江南では濁音が保存されていること

43 劉曉東『匡謬正俗平議』卷5，山東大學出版社，1999。

44 北宋朱彧『萍州可談』卷1にも「以堤音低，頗爲語忌」（「蘇公堤孟家蟬語識」條）という。（『後山叢談 萍州可談』，宋元筆記叢書，上海古籍出版社，1989。）

45 『唐國史補 因話錄』，上海古籍出版社，1979。

を記録しているわけで、濁音清化の分布と合致している。

唐末五代の西北地区の敦煌資料からも全濁聲母の消失は確認されており<sup>(46)</sup>、これに對して上掲の『祖堂集』の諸例は同時期の東南地区の情況を示している。上掲8例はすべて藥山系の禪師の章に屬し、閩地福州の雪峰門下に傳承された資料である。なかでも玄沙師備（福州閩縣人）、福先招慶省燈（泉州仙遊縣人）は閩人であり、長慶慧稜（杭州海鹽縣人）、齊雲靈照（東國新羅人）は雪峰の弟子であった。これら5例から、9・10世紀の閩地ではすでに濁音清化の現象が見られるのであり、しかも不送氣清音との混用現象は現代閩方言の特徴と一致している<sup>(47)</sup>。

もうひとつ福建の例を舉げる。『聯燈會要』30卷は南宋初（1183）に晦翁悟明が温州永嘉で編纂した燈史で、いわゆる五燈の一であるが、その卷21の卷末に異例の跋を附している。内容は同卷に収める巖頭全豁禪師章の一則にちなむ回想である。

余乾道初，客建康蔣山，邂逅泉州一老僧。有巖頭錄，因閱之。見其「問僧：『甚處去？』」僧云：『入嶺禮拜雪峯去。』巖頭云：『雪峯若問你：巖頭如何？但向他道：巖頭近日在湖邊住，只將三文買箇撈波子，撈蝦撈蜆，且恁麼過時。』」因問老僧：「余閱『巖頭錄』，盡作老婆，此云撈波，何也？」渠笑云：「老婆誤也。巖頭、雪峯皆鄉人。吾鄉以撈蝦竹具曰撈波也。鄉人至今如是呼之。」後人訛聽，作老婆子，教人一向作禪會。『巖頭錄』他本作買箇妻子，『雪峯錄』作買箇老婆。後來眞淨舉了云：「我只將一文錢娶箇黑妻子。」所謂字經三寫，烏焉成馬，於宗門雖無利害，不可不知。雪峯空禪師

46 邵榮芬「敦煌俗文學中的別字異文和唐五代西北方音」，『邵榮芬音韻學論集』，首都師範大學出版社，1997。

47 伍巍「中古全濁聲母爲不送氣音的研究」，『方言研究集稿』，暨南大學出版社，2010。

頌有云：「三文撈波年代深，化成老婆黑而醜。」蓋方語有所不知，不足怪也<sup>(48)</sup>。

乾道年間の初め，建康蔣山に滞在した時，泉州から来た老僧にめぐり逢った。

その人が『巖頭録』をお持ちだったので拜見した。その一節にこうあった。

僧に問う，「どこへ行くのか？」僧「嶺を越えて雪峯禪師に拜謁に参ります。」

巖頭「雪峯がきみに，わしはどうしているかと尋ねたら，こう言ってくれ。

近頃は湖のはたに住みついて，三文で買った撈波子で，えびやしじみなんぞをすくって，そんなふうになんて送っておる，とな。」

わたしはその老僧に問うた。「わたしが以前讀んだ『巖頭録』はみな〈老婆〉となっておりましたが，ここは〈撈波〉です。どうしてでしょうか。」その人は笑って，「〈老婆〉は間違いだ。巖頭と雪峯はふたりともわしの同郷人で，わしのところではえびをすくう竹製のざるを〈撈波〉というのだ。村の者は今でもそう呼んでおる。」と。なるほど，のちの人が〈老婆子〉と聴きまちがえたうえに，禪的理解を押しつけていたのだ。『巖頭録』の他のテキストでは「買箇妻子」（妻を買って）になっているし，『雪峯録』では「買箇老婆」（かみさんを買って）になってしまっている。それで後世の眞淨克文は，この話を紹介したあと，「わしなら一文で真ッ黒けのかみさんをもらうぞ」などと言いつつ出すしまつだ。いわゆる「字は三寫を経て，烏焉は馬と成る」という類で，宗門に直接の害はないけれども，注意しておくべきである。雪峯慧空禪師は頌を作って皮肉っている。「三文の撈波，年代深し，化して老婆と成り黒くして醜し」と。けだし，方言を知らぬことによる誤解で，無理もないことではある。

乾道は南宋孝宗の年號（1165-1173）。巖頭全豁（828-887）と雪峯義存（822-908）は若年に結伴行脚した仲である。泉州の老僧が教えてくれた「撈波」と訛傳の

---

48 『聯燈會要』卷21，續藏經第136冊（卅續選輯史傳部6）。

「老婆」を『廣韻』でみると、

撈 魯刀切 來母豪韻平聲 (lau) 波 博禾切 幫母戈韻平聲 (puɑ)

老 盧皓切 來母皓韻上聲 (lau) 婆 薄波切 並母戈韻平聲 (buɑ)

であって、つまり主には第二字の聞き間違いが原因であったと知られるが、それは全濁聲母（平聲）と不送氣清音（無聲無氣）の混同であり、しかも方言語彙にかかわっている。巖頭、雪峯はともに泉州南安の人、『聯燈會要』の撰者晦翁悟明は福州の人で、おなじ福建でも閩東と閩南ではこのように方言が通じないことがあったのだ。始末が悪いのは、意味の通じないところを、禪僧は「禪的解釋」をもって無理なこじつけをやることである。巖頭の任運隨縁の撈波（竹ざる）が老婆（かみさん）に變じては、何かの象徴のように扱う「禪會」を爲す人も出てくるというのであるが、これは禪文獻に文字の誤りが放置される原因でもあろう。

## 〔二〕齒音莊組章組不分，精組章組不分

(1) 束 書玉切（書母 [ɕ] 燭韻合口三等入聲）／

縮 所六切（生母 [ʃ] 屋韻合口三等入聲）

【例】問：「久戰沙場，爲什麼功名不就？」師云：「君王有道三邊靜，何勞萬里築長城？」進曰：「罷息干戈，縮手歸朝時如何？」師云：「滋（慈）雲普潤無邊際，枯樹無花爭奈何？」（卷19，靈雲章，頁716/851）

【校】「縮手」は『景德傳燈錄』卷11靈雲章では「束手」に作る。「縮手」ならば拱手旁觀，「束手」は抵抗をやめて歸順する意。「束手」が正しく，「縮手」は近音による誤りであろう。

(2) 川 昌緣切（昌母 [tʃ] 仙韻合口三等平聲）／

筌 此緣切（清母 [tʃ] 仙韻合口三等平聲）

【例】師云：「在舍只言爲客易，臨筌方覺取魚難。」（卷9，九峯章，頁

358/438)

【校】諺語「家にいる時、旅に出るのはいとも簡単とのみ思う（旅に出てはじめて旅の辛さがわかる）。淵まで来てはじめて、魚を捕るのが難しいと知る。」「臨筌」は、『聯燈會要』卷23九峯章では「臨淵」に、『五燈會元』卷13九峯章では「臨川」に作る。この三種の書き方から見て、『祖堂集』が據った唐代の原文は「臨川」であったはずである。『祖堂集』はこれを近音の「臨筌」（筌は魚の縁語）に誤ったのであり、『聯燈會要』は「川」が「淵」の避諱であると考え、回改して「臨淵」としたのであろう。なお、現代閩南音では「川」「筌」二字は同音[tshuan]（『漢字古今音表』，中華書局，1993）。

(3) 速 桑谷切（心母 [s] 屋韻合口一等入聲）／

觸 尺玉切（昌母 [tɕʰ] 燭韻合口三等入聲）

【例】曹山云：「曹山適來問，闍梨與摩祇對曹山，是什麼時節？但觸道！觸道！」師云：「却是相見時節。」（卷12，荷玉章，頁448/543）

【校】「觸道」は「速道」の音誤。本書卷7夾山章に「佛日云：『三道寶塔，曲爲今時。向上一路，請師速道！速道！』」。

上例（1）は正齒音の莊組字（縮）と章組字（東），例（2），（3）は齒頭音（舌尖前音，平舌）の精組字（筌，速）と正齒音（舌面音，捲舌）の章組字（川，觸）の混同によるものである。それぞれ靈雲志勲（生卒年未詳，福州の人），九峯道虔（？－921，福州侯官の人），曹山本寂（840－901，泉州莆田の人）の會話文中の表記（靈雲章のみは質問僧）。この場合，九峯，曹山二人がこういう發音をしたというより，記録された時にこのように表記されたとみなすべきであろうが，ともかくこのように誤った記録が福建で傳承され，それが訂正されることなくのこされているということである。そしてこの現象が現代閩方言

の「古莊，章組聲母字の今の聲母は，精組の聲母と同じに讀まれる」<sup>(49)</sup>という特徴と一致するのである。唐五代では西北敦煌俗文學寫本にも「莊，章組代用例」，「精，章組代用例」があり，『開蒙要訓』注音にも「精組と知・章組の互注例」があるから<sup>(50)</sup>，むろんこれは閩地のみの特徴ではない。

### 〔三〕牙音見溪混用

- (1) 既 居豪切（見母 [k] 未韻去聲）／豈 祛豨切（溪母 [kʰ] 尾韻上聲）

【例】經句日却問：「和尚，前日豈不是，除此之外，何者是心？」（卷5，大顛章，頁184/242）

【校】「豈」は「既」の音誤である。『宗鏡錄』卷98大顛和尚條では「經日却問：『前日既不是心，除此之外，何者是心？』」（T. 48, 944a），『景德傳燈錄』卷14大顛章も「經句日，師却問曰：『前者既不是，除此外，何者是心？』」。

- (2) 堪 口含切（溪母 [kʰ] 覃韻平聲）／敢 古覽切（見母 [k] 敢韻上聲）

【例】〈1〉師問雲居：「什麼處去來？」對曰：「踏山去來。」師曰：「阿那個山敢住？」對曰：「阿那个山不敢住？」（卷6，洞山章，頁242/305）

〈2〉南泉…云：「雖是後生，敢有彫啄之分。」（卷6，洞山章，頁242/305）

〈3〉問：「如何是修行路？」師云：「好个阿師，莫作客。」僧云：「畢竟如何？」師云：「安置則不敢。」（卷14，茗溪章，頁530/629）

【校】上掲三例の「敢住」，「敢有」，「不敢」はそれぞれ「堪住」，「堪有」，

49 陳章太，李如龍『閩語研究』，語文出版社，1991，3頁。

50 邵榮芬「敦煌俗文學中的別字異文和唐五代西北方音」。

「不堪」の誤りである。〈1〉『景德傳燈錄』卷17,『聯燈會要』卷22の雲居章は「堪住」に作る。〈2〉『景德傳燈錄』卷15洞山章は「此子雖後生, 甚堪彫琢。」〈3〉『景德傳燈錄』卷6 茗溪章は「安置則不堪。」

- (3) 勘 苦紺切(溪母 [k ']) 勘韻去聲) / 敢 古覽切(見母 [k] 敢韻上聲)

【例】有人舉似師, 師云:「老僧自去勘破。」師自去問:「趙州路, 什麼處去?」老婆云:「驀底去!」師歸院, 向師僧云:「敢破了也。」(卷18, 趙州章, 頁665/793)

【校】さいごの「敢破」は上文の「勘破」に據って改めるべきである。『景德傳燈錄』卷10趙州章,『趙州錄』卷下は正しく「勘破」に作っている。

- (4) 舉 居許切(見母 [k] 語韻上聲) / 去 羌舉切(溪母 [k ']) 語韻上聲)

【例】因舉體師叔《古曲偈》曰:「古曲發聲雄, 今古唱還同。若論第一拍, 祖佛盡迷蹤。」師拈問:「只如祖佛盡迷蹤, 成得个什麼邊事?」僧曰:「成得个佛未出世時事, 黑豆未萌時事。」[師云:「只如佛未出世時事, 黑豆未萌時事, 成得个什麼邊事?」] 云:「某甲到這裏去不得。未審師如何?」(卷10, 長慶章, 頁403/491)

【校】「去不得」は「舉不得」(言舉げできない, 言えない)の音誤である。本條は卷11惟頸禪師章(頁440/530)にも採録があり, そこでは正しく「舉不得」となっている。

- (5) 舉 居許切(見母 [k] 語韻上聲) / 起 墟里切(溪母 [k ']) 止韻上聲)

【例】師云:「不聞道:『繁興大用, 舉必全眞』?」(卷13, 報慈章, 頁500/597)

【校】引用は法藏『華嚴金師子章』の「論五教」の二句(中國佛教典籍

選刊『華嚴金師子章校釋』30頁)で、「舉」は「起」の誤り。「萬象が生起するとき、かならず眞實の全體が現れる」。本書卷13山谷章、卷20五冠山章にも引用があるが、みな「起」である。

- (6) 个 古賀切(見母[k] 箇韻去聲)／顆 苦果切(溪母[kʰ] 果韻上聲)

【例】師云：「秀才唯獨一身，還別有眷屬不？」對曰：「某甲有山妻，兼有兩顆血屬。」(卷15，西堂章，頁553/656)

【校】「顆」は「个」の音誤。本書卷14馬祖章に類似の句がある。「有西川黃三郎，教兩個兒子投馬祖出家。」(頁519/613)

- (7) 可 枯我切(溪母[kʰ] 哿韻上聲)／个 古賀切(見母[k] 箇韻去聲)

【例】〈1〉這個老漢行脚時，或遇著草根下有个漢，便從頭顙上啄(卓)一下錐，看他若知痛痒，便將布袋盛米供養。他古人个中總似你與摩容易，何處更有今日事也？」(卷16，黃檗章，頁613/731)

〈2〉師別申一問：「隱密全生(眞)時，人知有道得；大省無辜時，人知有道不得。於此二途，猶是時人昇降處。未審長老親道，自道，云何道？」徑山云：「我家道處無可道。」(卷11，佛日章，頁444/536)

【校】〈1〉「个中」は「可中」(もし)の誤り。『景德傳燈錄』卷9黃檗章は正しく「可中」に作る。張相『詩詞曲語辭匯釋』卷1に「可中，猶云其或、假使也。」〈2〉「無可道」(言葉で表現できるものはない)は『景德傳燈錄』卷11徑山章では「無箇(个)道」(「言葉で表現できない以上」言うということがない，すなわち「不説之説」の意)に作る。

見溪混用例がこのように多いことも『祖堂集』用字の特徴であるが、『漢語方音字匯』に列する20地区の現代方音には對應を見い出せない。牙音見(不送



氣) 溪(送氣) 混用例は敦煌變文(「舜子變」)に1例, 『開蒙要訓』に互注2例がある<sup>(51)</sup>。南宋羅大經『鶴林玉露』卷3乙編「姦錢」條にいう,

今江湖間, 俗語謂錢之薄惡者曰「慳錢」。…俗音訛以「姦」爲「慳」爾<sup>(52)</sup>。

姦 古顔切(見母[k] 刪韻平聲)／慳 苦閑切(溪母[kʰ] 山韻平聲)

羅大經は江西廬陵の人, 『鶴林玉露』は淳祐戊申(8年, 1248)の自序がある。孫奕『九經直音』は宋代吉安方言(贛語)の特色を反映しており(孫奕は廬陵の人, この書は12世紀末から13世紀初の著作), 牙音の互注に「見溪母混用が(牙音2490例中)48例に達する。漢語では[k], [kʰ], [ŋ](見, 溪, 群)はしばしば混用されるが, このように多くの見溪混用例があることからみて, 方言音(または異讀)である可能性がある」と言われる<sup>(53)</sup>。『祖堂集』の見溪混用も同様に唐末五代南方もしくは閩地の方言音をあらわすものであろうか。

#### [四] 喉音影以混用

一 於悉切(影母[ʔ] 質韻入聲)／亦 羊益切(以母[j] 昔韻入聲)

【例】偶一日買(賣)柴次, 有客姓安名道誠, 欲賣(買)能柴。其價相當, 送將至店。道誠與他柴價錢, 惠能得錢, 却出門前, 忽聞道誠念《金剛經》, 惠能亦聞, 心開便悟。(卷2, 惠能章, 頁88/124)

【校】「亦聞」は「一聞」の音誤。この記述は敦煌本『六祖壇經』にもとづいている。「忽有一客賣(買)柴, 遂領惠能至於官店。客將柴去,

51 洪藝芳『唐五代西北方音研究』, 中國文化大學中國文學研究所碩士論文, 1995。

52 羅大經『鶴林玉露』, 唐宋史料筆記叢刊, 中華書局, 1983, 171頁。

53 李無未・李紅『宋元吉安方音研究』, 中華書局, 2008, 39頁。

惠能得錢，却向門前，忽見一客讀《金剛經》，惠能一聞，心明便悟。」  
(敦煌博物館藏本，『敦煌寫本壇經原本』，文物出版社，1997)

「一」と「亦」の混用例は敦煌變文寫本にもしばしば見られるところである(影，以代用例：「漢將王陵變」，「舜子變」，「廬山遠公話」等<sup>(54)</sup>)。

#### [五] 喉音匣云混用

王 兩方切(云母 [j] 陽韻平聲)／黃 胡光切(匣母 [ɣ] 唐韻平聲)

【例】百丈和尚，嗣馬祖大師，在江西。師諱懷海，福州長樂縣人也，姓黃。  
(卷14，百文章，頁536/636)

【校】百丈懷海の俗姓は，陳詔の撰する「唐洪州百丈山故懷海禪師塔銘」が「大師，太原王氏，福州長樂縣人。遠祖以永嘉喪亂徙于閩隅。」(『敕脩百丈清規』卷6，『全唐文』卷336)というのに従うべきである。

「黄」，「王」二字の混同は，宋代の隨筆にしばしば言及する有名なものである。

黄王不分，江南之音也。嶺外尤甚。柳子厚《黄溪記》：「神王姓，莽之世也。莽嘗曰：余黄虞之後也。黄與王，聲相通。」以此考之，自唐以來已然矣。(朱翌『猗覺寮雜記』卷下)<sup>(55)</sup>

〈黄〉と〈王〉の音を混同するのは，江南音の特徴であり，嶺南で特にひどい。柳宗元の「遊黄溪記」(永州八記)に「ここの神の姓は王氏，王莽の世のことである。莽はかつて『われは黄帝，舜帝の後裔である』と言っていた。〈黄〉と〈王〉とは音あい通ずるのである」という。してみれば，混同は唐以來久

54 邵榮芬「敦煌俗文學中的別字異文和唐五代西北方音」。

55 『猗覺寮雜記』卷下，筆記小説大觀第四輯。

しいのである。

その他、周密『癸辛雜識』續集下（「浙之東，言語黃王不辨，自昔而然」）<sup>(56)</sup>，莊綽『雞肋編』卷上（「俗誤以魔爲麻，謂其魁爲麻黃，或云易魔王之稱也」）<sup>(57)</sup>にも指摘や例證があり，後者は福建から温州，兩浙にわたって廣がった「事魔食菜」と呼ばれる民衆宗教の記事である。「黃王不辨」は呉語の特徴で，明代の陸容『菽園雜記』卷四，張位『問奇集』にもその指摘があり<sup>(58)</sup>，現代においても長江以南の南方方言（温州，厦門，潮州を除く）まで一貫する（『漢語方音字匯』<sup>(59)</sup>）。がんらいこの匣云二母は上古から六朝時代までは同紐であり，隋唐時代に北方では匣母から云母が分化獨立したが，南方では依然として同聲不分であった。匣喻（云，以）二母の混合は原本『玉篇』，李善『文選』注<sup>(60)</sup>，『說文解字繫傳』朱翱反切<sup>(61)</sup>など南方系の音韻資料にも現れている。

「黃」，「王」二字の混同は宕攝唐韻と陽韻の同用であるが，『祖堂集』所收偈頌には隋唐同用が7例見出せることも，二字の混同が偶然ではないことの旁證となしうる。「黃」，「王」二字は，このように『祖堂集』の時代と地域においては聲母韻母ともに通用される情況にあった。現代の福建境内で「黃」のh音が脱落して「王」と同音になるのは閩北，閩東（福州・古田[uoŋ]，寧德[uŋ]），閩中（永安・三明[um]），莆仙[uŋ]にわたっている（『福建省志・方言志』<sup>(62)</sup>）。

56 『癸辛雜識』續集下，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1988，207頁。

57 『雞肋編』卷上，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1983，12頁。

58 鄭張尚芳「呉語方言の歴史記録及文學反映」，『東方語言學』第7輯，上海教育出版社，2010。

59 北京大學中國語言文學系語言學教研室編『漢語方音字匯』（第二版重排本），語文出版社，2003。

60 大島清二『唐代字音の研究』汲古書院，1981，101頁。

61 王力『漢語語音史』中國社會科學出版社，1985，233頁。

62 福建省地方志編纂委員會編『福建省志・方言志』，方志出版社，1998。

閩南泉州・厦門音では二音に區別がある。王 [ɔŋ2], 黄 [hɔŋ2] (『閩南方言大詞典』<sup>(63)</sup>, 『厦門方言志』<sup>(64)</sup>)。

〔韻母〕

『祖堂集』の異文別字の検討を通じて知られる韻母混同の記述においては、『廣韻』同攝同調を「同用」, 同攝異調を「通用」, 異攝同調を「混用」と呼ぶことにする。(＊は参考例)

- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| [一] 果攝(a) 哿箇通用 可／个 | [五] 效攝(a) 皓号同用 保／報   |
| (b) 果箇通用 个／顆       | (b) 蕭陽混用 遼／量         |
| [二] 遇攝(a) 魚虞同用 居／俱 | [六] 咸攝(a) 覃敢通用 堪／敢   |
| (b) 語御通用 舉／去 ＊曙／暑  | (b) 敢勘通用 勘／敢         |
| (c) 魚麻混用 居／家       | (c) 盍合同用 踏／榻         |
| (d) 麌遇通用 ＊住／柱 ＊注／柱 | [七] 山攝(a) 寒旱通用 懶／蘭・攔 |
| [三] 蟹攝(a) 齊祭通用 齊／際 | (b) 桓緩通用 管／觀 斷／端     |
| (b) 蟹駭同用 駭／解       | (c) 桓換通用 盤／半         |
| (c) 霽祭同用 濟／際       | (d) 末黠同用 撥／拔         |
| [四] 止攝(a) 支脂同用 支／祇 | (e) 刪銜混用 巖／顏         |
| (b) 之微同用 期／機       | (f) 先青混用 年／寧         |
| (c) 至志同用 致／置       | [八] 臻攝(a) 文問通用 運／雲   |
| (d) 至未同用 貴／媿       | (b) 眞侵混用 塵／沈         |
| (e) 之紙通用 而／爾       | (c) 眞青混用 閩／冥         |
| (f) 脂旨通用 祇／指       | (d) 質昔混用 一／亦         |

63 周長楫主編『閩南方言大詞典』(修訂本), 福建人民出版社, 2006.

64 厦門市地方史編纂委員會辦公室編『厦門方言志』, 北京語言學院出版社, 1996.

(g)支至通用 離／利

[九]宕攝(a)陽唐同用 王／黃

(h)旨至通用 至／指

(b)陽漾通用 \*郷／嚮

(i)尾未通用 既／豈

[十]曾攝(a)職質混用 翼／逸

(j)止語混用 舉／起 以／於

(b)職德同用 即／則

(k)至霽混用 祕／閉

『祖堂集』異文別字が方言音にもとづく想定されるのは、異攝間の韻母の混用例（ゴチックで示したもの）であるから、これらを以下に検討したい。

# (1) 魚麻混用 [居／家]

居 九魚切（見母魚韻 [iə] 平聲）／家 古牙切（見母麻韻 [a] 平聲）

【例】師問：「汝是白家兒不？」舍人稱白家易。」（卷3，鳥窠章，頁105/146）

【校】「白家易」が白居易を指すことは明らかであり，「稱」（名のる）と言っているから，「白居易」と答えたはずであるが，「居」を上文に牽かれて「家」に誤ったのである。

これは白居易を「白家易」と書き誤った例である。誤寫の原因は上文に「白家兒」とあるのに牽かれたためであるが，書者にあつてはおそらく「居」，「家」が同音ないし近音であつたのであろう。この二字は上古音（『詩經』韻）から前漢音までは魚部に屬し，後漢以後に魚部から麻韻字が分かれて歌部に轉入し，唐代には麻韻が獨立した。明の田藝蘅『留青日札』卷38「通俗古音」條に「家有三音」として，「家又音居」を挙げ，『史記』孟嘗君列傳，『左傳』僖公十五年に引かれる古詩の協韻をその例證としている<sup>(65)</sup>。田氏は16世紀杭州の人で，

65 田藝蘅『留青日札』卷38，明清筆記叢書，上海古籍出版社，1992，723頁。

この「通俗古音」條は當時の通俗音に古典の根據があることを示す意圖で書かれたものであるから、「家」を「居」に讀む音があったのである。また12世紀建甌（閩北）方音の特徴を示すと言われる南宋初の呉棫『韻補』上平聲魚韻に「家」字（攻乎切，居也）を収めており<sup>(66)</sup>，宋代福建文士の倣古的用韻に麻車部と魚模部の通押5例（出身別に閩北2，閩東2，莆仙1）<sup>(67)</sup>があるところからすると，唐末五代成書の『祖堂集』に見える「家」，「居」混同は，閩地に古音として遺存していたことがその背景にあったためであろう<sup>(68)</sup>。

(2) 止語混用〔舉／起〕

舉 居許切（見母語韻〔iɔ〕開口三等上聲遇攝）／

起 墟里切（溪母止韻〔ie〕開口三等上聲止攝）

【例】【校】上掲聲母牙音見溪混用（5）參照。「舉必全興」→「起必全興」  
（卷13，報慈章，頁500/597）

於 央居切（影母魚韻〔iɔ〕開口三等平聲遇攝）／

以 羊已切（餘母止韻〔jiə〕開口三等上聲止攝）

【例】又夾山頓遇以華亭頌曰：「一泛輕舟數十年，隨風逐浪任因緣。…」  
（卷5，華亭章，頁203/260）

【校】「遇以華亭」は「遇於華亭」の音誤。

上例は陸游の「呉人は〈魚〉字を訛って發音し，魚韻〔iɔ〕はすべて開口になっ

66 『宋本韻補』卷1，中華書局，1987。邵榮芬「吳棫『韻補』和宋代閩北建甌方音」，『邵榮芬音韻學論集』，首都師範大學出版社，1997。

67 劉曉南『宋代閩音考』，岳麓書社，1999，125頁。

68 拙稿「祖堂集鳥窠章音韻考證」（『白居易研究年報』第9號，2008）參照。

ている」<sup>(69)</sup>と言ったことの實例である。宋人のいう「呉人」は通常閩地までも含めて言われる。宋代詞韻の調査によると、「支魚通押は贛，閩，呉地區詞人にかなり廣く見られ」<sup>(70)</sup>，7～13世紀北京地區の詩文には、「支魚通押は唐五代に7例，宋代に5例あるが，金代には見られず，減少の趨勢にある。唐代で北方に見られたこの特徴は，宋代以後北方地區ではしだいに消失し，南方の呉，閩，贛方言で普遍的な現象となった」<sup>(71)</sup>，「支微，魚模混押は宋代江淮，呉，閩方言に分布し，今日でも多くの方言には依然〈支微入魚〉が廣泛に分布している」<sup>(72)</sup>，「支魚通押は宋代南方詩人の用韻に廣く存在する現象であるが，四川地區の詩詞文の例は贛，呉，閩地區よりはるかに多い」<sup>(73)</sup>という。『祖堂集』所收偈頌には3例の合用がある。

之微眞魚合用 [17. 岑和尚15] 議眞依微思時之如魚

止御合用 [11. 雲門1-6] 已似止慮御

止未語合用 [11. 雲門1-1] 子止許語氣未

この混用は敦煌俗文學にも多數の例（邵榮芬論文中の「魚，虞和止攝各韻相混」の項）がある。

### (3) 至霽混用 [祕／閉]

祕 兵媚切（幫母至韻 [jɪ] 開口三等去聲止攝）／

閉 博計切（幫母霽韻 [ɛi] 開口四等去聲蟹攝）

69 陸游『老學庵筆記』卷6，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1979。

70 魯國堯「論宋詞韻及其金元詞韻的比較」，『宋遼金用韻研究』，58頁，香港文化教育出版社，2002。

71 劉曉南「宋代文士用韻與宋代通語及方言」，『宋遼金用韻研究』，94頁，香港文化教育出版社，2002。

72 張令吾「北宋詩人徐積用韻研究」，『宋遼金用韻研究』，186頁，香港文化教育出版社，2002。

73 劉曉南『宋代四川語音研究』，北京大學出版社，2012，122頁。

【例】閉魔巖和尚，嗣馬祖。師常提杈子，每見僧參，慕項便杈云：「那个魔魅教你出家？那个魔魅教你受戒？那个魔魅教你行脚？道得亦杈下死，道不得亦杈下死。速道！速道！」其無對，師便打趂出。（卷15閉魔巖和尚，頁583/698）

【校】『景德傳燈錄』卷10は「五臺山秘魔巖和尚」に作る。この秘魔巖は五臺山の西臺にある。『宋高僧傳』卷21唐清涼山秘魔巖常遇傳には，大中4年（850）に五臺山を巡禮した常遇が，ここで金色に輝く雲を見て感激し，廟宇を築いて住したことを記しているが，秘魔巖について，「後至西臺，遇古聖跡曰秘魔巖，乃文殊降龍之處也。」と言っている。ところが，より古い『古清涼傳』の記述では「秘魔巖」であった。

西臺略無可述。臺之西有秘魔巖者。昔高齊之代，有比丘尼法祕。惠心天悟，真志獨拔。脫落囂俗，自遠居之，積五十年，初無轉足。其禪惠之感，世靡得聞。年餘八十，於此而卒。後人重之，因以名巖焉。（T51,1095bc）

「祕」は比丘尼の名，「麼」は麼尼，すなわち比丘尼をいう（『廣韻』下平戈韻）のであるから，「秘麼巖」という名の由來としてきわめて自然であるが，これが誤って「秘魔巖」となったらしい（「麼」と「魔」は同音，莫婆切）。さきの『宋高僧傳』常遇傳に言うように，「文殊降龍之處」とされたことがその表記の變化の理由をものがたっている。すなわち「秘魔」とは惡龍をとじこめる意であり，この意において「閉魔」という表記が出てきたのだと推測される。『祖堂集』に記される禪師の事跡は，いかにも惡魔祓いと呼ばれるにふさわしい。

「閉」「祕」二字は，上古音ではともに入聲質部幫母に屬する同音字であった。中古音（『廣韻』）では韻母が異なる。



閉 博計切 蟹攝幫母霽韻開口四等去聲 \*piɛi3<sup>(74)</sup>

祕 兵媚切 止攝幫母至韻開口三等去聲 \*pie3

すなわち「祕」を「閉」と書くのは止攝字と蟹攝字の混用の結果である。この二攝の混用は『祖堂集』所收の偈頌の通押にも多く見える現象である。

卷1 提多迦章	毬多偈	慧霽地至
卷1 毘羅章	傳法偈	際祭智真
卷7 巖頭章	頌	事志彩海
卷10 鏡清章	頌	是紙置至綴霽
卷14 高城章	歌行第16韻段	畏未對隊意志
卷15 伏牛章	三个不歸頌第1韻段	迷齊飛歸微
卷17 正原章	偈	洗齊醫時之
卷19 香巖章	明古頌第5韻段	冪旨底齊細霽
卷19 香巖章	明古頌第8韻段	諦霽氣貴未

唐作藩「唐宋間止、蟹二攝的分合」は、中晩唐期に至って二攝の通押現象が増えるのは、二攝の内部諸韻が合流に向かい、主母音が近くなったため音近による通用がおこったのであるとして、次のように言っている。「この時期の蟹攝は、一二等韻の灰哈泰皆佳夬が一部（讀音は ai, uai）となり、三四等韻の齊祭廢が一部（讀音は iɛi, iuɛi）となり、そして止攝の支脂之微が一部（讀音は i, iɔi, iuɔi）となったために、詩歌韻文中に合韻することがおこったが、とくに齊（祭廢）部と灰（哈泰皆佳夬）部合口一等字が支（脂之微）部と合韻する情況がより増えたのは、その讀音がいっそう近くなったためである。」<sup>(75)</sup>これは上掲『祖堂集』の通押をよく説明するものとなっている。

この混用は敦煌俗文學にも多數の例（邵榮芬論文中の「止攝和齊韻的關係」

74 擬音は邵榮芬『切韻研究 校訂本』（中華書局，2008）に據る。以下同。

75 唐作藩『漢語史學習與研究』商務印書館，2001，137頁。

の項)があり、寫本レベルにあるテキストの常見の誤りでもある。

唐代で区別のあった脂、齊韻は、宋代通語（汴洛中州之音）では「蟹攝三四等は止攝に併入」<sup>(76)</sup>した。『祖堂集』至霽混用例（山西五臺山の地名表記）は、この語音變化が中原、西北、東南地區に共通していることを示している。

#### (4) 蕭陽混用 [遼／量]

遼 落蕭切（來母蕭韻 [ieu] 開口四等平聲效攝）／

量 呂張切（來母陽韻 [ian] 開口三等平聲宕攝）

【例】〈1〉處世道流（孤），興慈量闊。（卷2，道信章，淨修讚，頁82/115）

〈2〉問：「量郭無涯，爲什麼不容自己？」（卷9，落浦章，頁342/417）

【校】「量闊」，「量郭」ともに果てしなく廣い義で用いられているから，「量」は「遼」の音誤であろう。本書卷2般若多羅章淨修讚に「道源遼廓」の句がある。

蕭陽韻混用はいわゆる陰陽對轉であるが，鼻音韻尾が脱落または鼻母音化して同音ないし近音となったために起こる現象である。『朝野僉載』卷2に冀州參軍麴崇裕が自作詩の「行」（庚韻），「哀」（哈韻）通押を「吳兒博士教此聲韻」<sup>(77)</sup>といい，顏師古『匡謬正俗』に歌・寒 [柯／干]（卷6），齊・先 [西／先]（卷8），尤・東 [柔／戎]（卷6）混用の指摘があり<sup>(78)</sup>，南宋吳文英（四明の人）

76 劉曉南「宋代文士用韻與宋代通語及方言」，『宋遼金用韻研究』，89頁，香港文化教育出版社，2002。

77 『隋唐嘉話 朝野僉載』，唐宋史料筆記叢刊，中華書局，1979，49頁。

78 趙振鐸「唐人筆記裏面的方俗讀音」。

の詞に支微部と「繁」(元韻)の合用が報告されている<sup>(79)</sup>。上例「量」の字音が現代方言で鼻音韻尾の脱落または鼻母音化している地域は太原, 合肥, 温州, 厦門 [nĩu2 白讀], 潮州 (『漢語方言字匯』)。現代閩語で鼻音韻尾が脱落または鼻母音化するのは莆仙, 閩南方言であるが, 泉州音は [hũ2 白讀] (『泉州市方言志』)<sup>(80)</sup>。この『祖堂集』巻2道信章の淨修讚は淨修禪師文燈の作, 文燈は仙遊の人で泉州招慶寺の住持であったから, かれの口音では鼻音韻尾が鼻母音化していたのであろう。

(5) 刪銜混用 [巖／顔], 先青混用 [年／寧], 眞侵混用 [塵／沈], 眞青混用 [閩／冥]

巖 五銜切 (疑母銜韻 [am] 平聲) / 顔 五姦切 (疑母刪韻 [en] 平聲)

【例】〈1〉師一日看經次, 白顔問: “和尚休得看經, 不用攤人得也。” (巻4 藥山章, 頁176/232)

〈2〉師到百顔。顔問: “近離什麼處?” (巻6 洞山章, 頁232/297)

【校】〈1〉「白顔」は『景德傳燈錄』巻7定州栢巖明哲章に「栢巖」に作る。〈2〉「白顔」は『景德傳燈錄』巻14は同じ。『聯燈會要』巻5定州栢巖明哲章は「栢巖」として兩則を合わせて一人とし, 『五燈會元』巻5はこれに依る。兩「顔」字は「巖」の音誤であらう。

年 奴巔切 (泥母先韻 [ien] 平聲) / 寧 奴丁切 (泥母青韻 [ien] 平聲)

【例】巖頭和尚嗣德山, 在鄂州唐寧住。(巻7 巖頭章, 頁269/335)

【校】「唐寧」は「唐年」の音誤。『宋高僧傳』巻23巖頭傳に「又居唐年山, 山有石巖巖嶽, 立院號巖頭歟。」「太平寰宇記」巻112鄂州崇陽縣條に「唐天寶二年 (743) 置唐年縣, 僞吳順義七年 (927) 改爲崇陽, 僞唐 (南

79 胡運騰「南宋浙江詞人用韻及其所反映的語音演變現象」, 『宋遼金用韻研究』, 香港文化教育出版社, 2002.

80 『泉州方言志』, 社會科學文獻出版社, 1993, 90頁。

唐，937－975）改爲唐年，皇朝改爲崇陽。」

塵 直珍切（澄母眞韻 [jen] 平聲）／沈 直深切（澄母侵韻 [jem] 平聲）

【例】一切事來，總須向這裏盪羅取。頭頭上須及，物物上須通。若有毫髮事乃（及）不盡，則被沈累，豈況於多？（卷8雲居章，頁298/366）

【校】「沈累」は「塵累」の音誤。『禪林僧寶傳』卷6雲居弘覺禪師傳，『聯燈會要』卷22洪州雲居道膺禪師章ともに「塵累」に作る。雲居道膺禪師（？－902）は幽州薊門玉田（河北省唐山市）の人。25歳で幽州范陽延壽寺において受戒後，長安終南山翠微寺をへて洪州洞山（江西省義豐縣）に至り，良价禪師に嗣法，中和三年（833）以後は終生洪州雲居寺（永修縣）に居住した。

閩 武巾切（明母眞韻 [jen] 平聲）／冥 莫經切（明母青韻 [ien] 平聲）

【例】靈樹和尚嗣西院安禪師，在韶州。師諱如敏，冥州人也。（卷19靈樹章，頁726/867）

【校】靈樹如敏（？～918）は『宋高僧傳』卷22に「閩人」，『景德傳燈錄』卷11に「閩川人」という。これに據れば，「冥州」は「閩川」の音誤かつ形誤であろう。

以上4例は鼻音韻尾 [-m]，[-n]，[-ŋ] の合併にかかわる現象である。『五國故事』卷上に載せる王延鈞（改名して鏐）の逸話は，閩方言の [-n]，[-ŋ] 合併を背景にしたものである。

延鈞既僭位，改名鏐。…俄而遇弑。鏐死，金陵以閩人語訛戲之：因送綾，遂以爲花絹，意以鏐爲綾，避其諱也<sup>(81)</sup>。

---

81 『五國故事』卷下，僞閩王氏，『全宋筆記』第一編第三冊，大象出版社，2003，250頁。

王延鈞が僞閩國の帝位に就き、名を鱗と改めた。…鱗が殺されたとき（935年）、南唐は閩人が訛って發音するのをからかって、弔問に綾（あやぎぬ）を送るさいに特に花絹と稱した。それは閩では「鱗」と「綾」と同音であるから、諱を避ける配慮を示したつもりなのである。〔送花絹＝送綾＝送鱗（鱗を始末する）という諷刺〕

鱗 力珍切 來母眞韻 [ien] 平聲／綾 力膺切 來母蒸韻 [iəŋ] 平聲

これによると、臻、曾二攝は閩では不分、南唐では分立であった。南唐徐鉉『説文解字繫傳』朱朝反切ではたしかに區別されている（王力『漢語語音史』）。

『宋遼金用韻研究』所收論考から知られるのは、宋代詩詞韻に見られる三鼻音韻尾の合併現象は、河北・山西、山東、四川、江西に少數現れるのに對して、江蘇（淮安）、浙江、湖南（荊南）、福建には壓倒的に多く、これが南方方言の特徴をなしていることである。福建について見ると、「福建詩韻の混押、閩人吳械の分韻、現代閩方言の閩北・閩東・閩中・莆仙話における合併という三つの特徴において一致が見られるのは、けっして偶然ではない。宋代福建では漳州、泉州（汀州）を除く地區の方音では、中古 [-m], [-n], [-ŋ] 三韻尾は合併のさなかにあったか、あるいはすでに合併（[-ŋ] 尾に歸一）していたことは疑いなかろう」<sup>(82)</sup>という。『祖堂集』所收偈頌にも [-n], [-ŋ] 混用が4例見られる（下文に掲出）。

#### (6) 職質混用 [翼／逸]

翼 與職切（以母職韻 [iək] 開口三等入聲曾攝）／逸 夷質切（以母質韻 [iet] 開口三等入聲臻攝）

【例】師有時良久，云：“自作自受。”或時見僧入門來，云“患顛那？作摩？”

82 劉曉南『宋代閩音考』，岳麓書社，1999，193頁。

僧便問：“未審過在什麼處？”師云：“不是蕭逸，爭取蘭亭？”（卷12，禾山章，頁455/554）

【校】「蕭逸」は「蕭翼」の音誤。蕭翼が太宗の命を受け僧辯才から「蘭亭序」搨本を詐取したことは『法書要録』卷3，『隋唐嘉話』卷下（作“蕭翊”。同音），『獨異志』卷中，『唐詩紀事』卷5，『能改齋漫錄』卷5，『雲麓漫鈔』卷6等に見えるが，『祖堂集』以外に「蕭逸」に作る例はない。

周祖謨「宋代汴洛語音考」にいう，「宋代語音の唐人と異なるところは，臻攝入聲と梗曾攝の合用である。合用の原因は入聲韻尾の失落であって，梗曾入聲は〔-k〕，臻入聲は〔-t〕でもともと同類でなかったのが，〔-k〕，〔-t〕が失落すると，母音の近いもの同士がしぜん通じあうことになったのである」<sup>(83)</sup>。禾山無殷（884-960）は福州連江縣の人である。宋代福建人の詩詞においては，〔-t〕，〔-k〕通押例が224を数え，「こうした現象から，宋代閩地において通語の入聲韻尾〔-t〕，〔-k〕はかなりの程度混同される傾向にあったか，あるいはすでに弱化して喉塞尾になっていたことがわかる」<sup>(84)</sup>。現代閩東福州音は翼 [iʔ8 文讀]，逸 [iʔ8]，閩南廈門音は翼 [ɪk8 文讀]，逸 [ɪk8 文讀]，閩北建甌音は翼 [i8 文讀]，逸 [i8] でいづれも同音（『漢語方音字匯』）である。

## 五.

『祖堂集』には340首（454韻段）の韻文が収録されている（そのうち佛典から引用された無韻偈が15首，重複が6首）。このなかの特殊押韻現象のなかには，

83 周祖謨『問學集』下冊，中華書局，1966，633頁。

84 劉曉南『宋代閩音考』，岳麓書社，1999，142頁。

やはり上述の南方方音あるいは閩音の例が見いだされる。劉曉南「宋代福建詩人用韻所反映の10世紀到13世紀の閩方言若干特點」<sup>(85)</sup>には、9大閩音特徴を總括して挙げている。(1) 歌豪通押, (2) 歌魚通押, (3) 支魚通押, (4) 魚尤通押, (5) 東陽通押, (6) 屋鐸通押, (7) 尤蕭通押, (8) 陽聲韻尾の合併, (9) 陽平の分化。この特徴に合致する『祖堂集』偈頌の例を以下に挙げる（〔卷. 章名. 章中偈頌, 韻段〕）。

### (1) 歌豪通押

歌豪合用 [11. 越山1] 歌歌荷荷高豪

歌皓笑嘯合用 [17. 關南1-2] 歌呵歌笑笑叫嘯要笑嘯道好老皓

歌〔a〕豪〔au〕通押は宋人に閩音の特徴を代表するものと見なされた特殊押韻で、10種もの詩話、筆記類に言及があり、早くは雪峯義存（822－908）の偈にも3例見える（『雪峯語錄』偈語「牧牛」, 「勸人」）<sup>(86)</sup>。ただし閩北には見られず、四川・江浙にも極めてまれにはあるが見られる（劉曉南1998）。越山鑒眞は年里未詳、雪峯の弟子で越州に住した。關南道常は年里未詳、杭州鹽官齊安（？－842）の弟子、襄陽に住した。

### (3) 支魚通押

止御合用 [11. 雲門1-6] 已似止慮御

止未語合用 [11. 雲門1-1] 子止許語氣未

之微眞魚合用 [17. 岑和尚15] 議眞依微思時之如魚

支魚通押は「七閩を貫通する一大特徴」と言われる（劉曉南1998）。『祖堂集』異文別字にも止語混用が見られた（上掲）。

85 劉曉南「宋代福建詩人用韻所反映の10世紀到13世紀の閩方言若干特點」, 1998, 『宋遼金用韻研究』, 香港文化教育出版社, 2002.

86 周長楫「從義存的用韻看唐代閩南方言某些特點」, 『語言研究』1994年増刊.

(7) 尤蕭通押

豪侯混用 [2. 達摩18] 鈎頭侯刀逃豪

宵豪尤混用 [10. 鏡清8-5] 毛豪遊尤遙宵

達摩章の志公（梁の寶誌和尚）作とされる識（豫言）は偽作であるが、この特殊な押韻は偽作者の出身地が閩地であることを暗示している。この特徴をもつ福建詩詞の作者の分布は、閩東、閩北にまたがり、閩南には及ばない（劉曉南1998）。

(8) 陽聲韻尾の合併

蒸文混用 [2. 達摩7] 繩蒸分文

庚清刪混用 [7. 雪峯4] 關刪橫明庚聲清

眞蒸混用 [10. 長慶2] 身親眞氷蒸

眞痕清混用 [17. 岑和尚11] 聲清根痕眞人眞

達摩章の那連耶舍識が後世の偽作であるのは別として、岑和尚（長沙景岑）は年里未詳[868卒?]であるが、湖南長沙で活動し、雪峯義存（822-908、南安の人）、長慶慧稜（854-932、杭州海鹽の人）はいづれも福建で活動した禪僧であるから、その方言音を反映するものであろう。この4例は鼻音韻尾[-n], [-ŋ]の混用であるが、上掲韻母混用の(5)に挙げた4例には[-m], [-n], [-ŋ]三韻の混用が見られた。宋代閩音の三韻合併の特徴は[-n] → [-ŋ] ← [-m]となり、かつ閩南には合併現象が見られないことである（劉曉南1998）。

結 語

上來検討してきた『祖堂集』異文別字と所收偈頌の押韻に現れた音韻現象には、閩地だけに見られるというものはないのであるが、これらの多くの方音現象を総合してみると、『祖堂集』本文には南方方音中の閩音のもつ特徴的な



異文別字の文字づかいが現れていることが了解される。『祖堂集』のもとづく資料は10世紀福建の雪峰門下に集められ、閩人によって整理編纂されたゆえに、『祖堂集』本文に南方方言中の閩音の痕跡をとどめていると解釈できるわけである。すなわち『祖堂集』の言語の基礎方言（方言的背景）を、梅祖麟氏は北方方言ないし共通語であり、まれに閩語語法成分がまじると推論されたが、わたしは方言的背景として閩語を想定してよいとかがえる。『祖堂集』はその語彙・語法が敦煌變文と基本的に同じであるから、當時の共通語で書かれたと言えようが、『祖堂集』には南方方言の語法が見られ、異文別字に南方方言中の閩音の特徴が看取されることから見て、その方言的背景には閩語が存在したと言ってよい。このことは現代作家の方言的背景をかがえてみるとわかりやすい。陸文夫（1928～2005）は蘇北出身の人であるが、若いとき蘇州に來住し蘇州の水郷を描いた作品を発表してきた。日常は蘇北話と普通話話す。むろんかれの作品は普通話で書かれているが、蘇州を題材にしているから、ときおり吳方言・江淮方言の語彙が摻雜し、文章表現にも日常使っている南方方言の語法が混じっていて、それが獨特の文章の味わい、文學性をかもしだしている。その作品の面白さは蘇州人がもっともよく味わえる。その作品中に宛て字（錯別字）が偶然使われることがあるが、それはかれの方言的背景に吳語があるためである<sup>(87)</sup>。

閩語内部の閩北・閩東・閩南の方言差は大きいと言われるが、上掲の『祖堂集』音韻と合致する特徴「聲母匣云混用」，「韻母魚麻混用」，「尤蕭通押」，「鼻音韻尾の合併」の分布が閩南を除外する点から見るととき<sup>(88)</sup>，『祖堂集』の編纂は泉州においておこなわれたが、その資料の音韻特徴は閩南泉州のそれではないということがわかる。すなわち、増廣された『祖堂集』原十卷本は、原一卷

87 廖大國「陸文夫作品中的吳方言」，『花園大學文學部研究紀要』第29號，1997。

88 劉曉南「宋代福建詩人用韻所反映的10世紀到13世紀的閩方言若干特點」表五「9大特點的地域分布圖」參照。『宋遼金用韻研究』403頁。

本の基礎の上に10世紀泉州において収集された禪僧の傳記・語録の集成であるが、その資料はおそらくはまづ福州雪峯山にもたらされ、そこですでに記録として定著していたと推測される。また同時に、原一卷本『祖堂集』（現行本の前二卷）の編纂者靜・筠二禪徳に關しては目下なにひとつ知られないが、卷2達摩章を主要に構成する18首の識のうちの志公、那連耶舍識2首が「尤蕭通押」、「鼻音韻尾の合併」を特徴とする點から見て、その18首の識の偽作者、また達摩章の撰者、あるいはさらに原一卷本『祖堂集』の編纂者である靜・筠二禪徳が、閩南以外の閩人であつたらしいことも推定されるのである<sup>(89)</sup>。

(2011. 3. 31初稿, 2012. 9. 15改稿, 12. 1補訂)

【附記】

本研究は2010年度花園大學特別研究助成による成果の一部である。成稿ののち秋谷裕幸氏に見てもらい、その意見に従って一部補訂した。あわせて心より謝意を表したい。

---

89 18首の識詞については個別の考證を要するので、別稿を草する豫定である。

# 《祖堂集》的基礎方言

衣川賢次

《祖堂集》二十卷是現存最早的一部完整的南宗禪燈史書，在研究唐五代禪宗思想以及中古、近代漢語史上均具有極高的文獻價值。而目前漢語史研究方面最大的關注在於此書是否包含唐五代的閩語成份這一問題。梅祖麟先生的一系列論文推斷：雖然《祖堂集》基本上使用唐宋時代的共通語（北方話）寫的，但書中的偈頌、會話中的一些語法和現代閩方言相一致，這就是唐五代的閩語。

梅先生所提的五項閩語成份是：一．表複數的人稱代詞詞尾“濃（儂）”；二．畜牲雌雄成份後置形式“～母”；三．方位介詞“著”；四．遠指代詞“許”；五．疑問代詞“底”。本文擬對此五項閩語語法成份作進一步的研究，證明這些成份（除第三・四項為誤解、第五項當為通語外）在唐五代不能認作閩語，只能認為其是表示南方方言特徵的標識。

至於《祖堂集》的基礎方言，筆者認為應當根據對書中的異文別字的音韻分析來研究。《祖堂集》文本的異文別字，聲母方面由於清濁混用、莊章組不分、精章組不分、見溪混用、影以混用、匣云（黃／王）混用等現象所致。這些現象有屬於通語性的，也有具南方方言性質的。韻母方面由於魚麻混用、支魚混用、陽聲韻尾的合併、入聲韻尾的合併等現象所致。這些音韻特徵同樣並非閩地獨有，但綜合起來看，還是符合包括閩語在內的南方方音特點。

《祖堂集》的各種原始資料，先滙集在閩東福州雪峰門下而後寫定，在泉州編纂而成書。《祖堂集》由閩人編定，其語言具有南方方音中的閩音特徵。因而我們可以認定此書的方言背景（基礎方言）確實是閩語。